

42060

教科書文庫

4

810

41-1916

20000
40085

T.5
1916

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

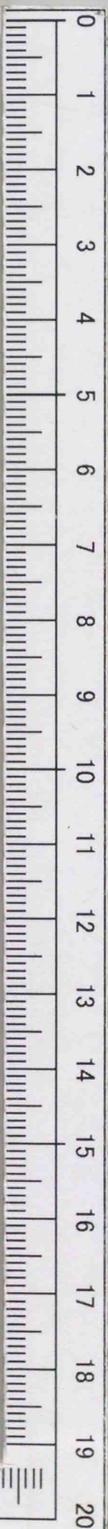
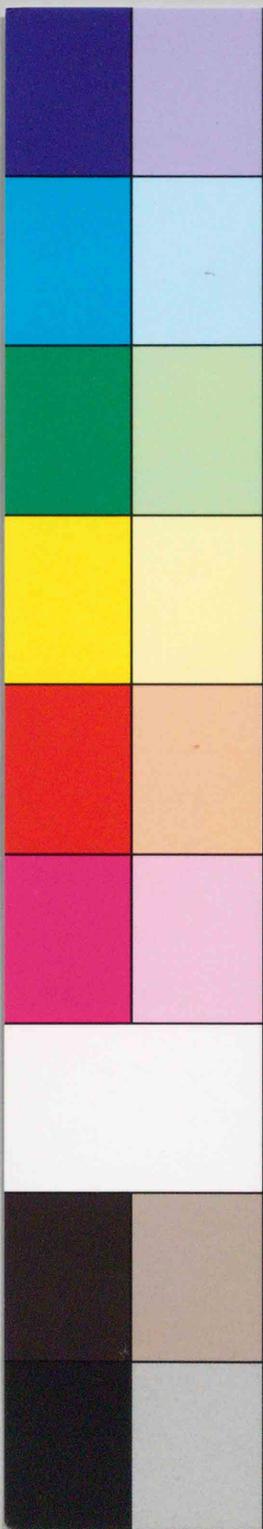
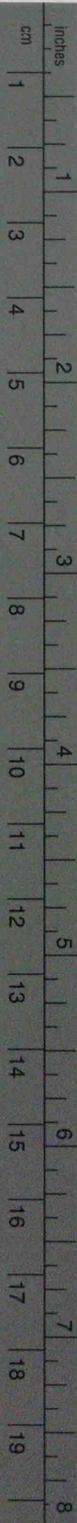


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Ob1
資料室

花月草紙抄

全



375.9
061

資料室

日一十二月二十年五正大
濟定檢省部文

文學士小原要逸編

花月草紙抄

東京寶文館



白河樂翁公小傳

白河樂翁公、名は定信、田安家徳川宗武の第七子、出でて松平家を嗣ぎ、磐城白河の城主となる。天明七年老中となり、十一代將軍家齊の政を輔佐す。寛政五年職を辭して後も、尙ほ久しく政務に參與す。父宗武は有職の學にくはしく、國文の保護者として、はた萬葉調の歌人として、知られたる人なり。されど、樂翁公の文事を獎勵せしことは遙に父に過ぎ、かの寛政の三學士と稱せられたる尾藤二州、古賀精里、柴野栗山等を登用して、大に文教を振起せり。殊に文化九年退隱するに至つては、吟哦研鑽これ勉め、悠悠として塵外に逍遙せり。世に黄昏の少將と稱す。文政十二年七十二歳を以て篋を易ふ。述作頗る多く、故實上の著に「集古十種」「輿車考」、歌集に「三草集」、隨筆に「關の秋風」「花月草紙」あり。

花月草紙抄目次

序……………一

なすと聞けば……………二

月のさしのぼる頃……………四

久方の空に任せて……………五

雪の降りたるに……………六

竹を好み愛づるも……………七

親のこの身を……………七

霜夜をわびて……………八

かのは……………九



ひでり續く頃は	一〇
ある人	一一
わが欲を	一二
この筆は	一三
みやび好むもの	一四
よく物を心にとめて	一七
えみしの人に	一八
やまと歌は	二〇
越路の深山は	二一
志五ありて	二二
月の夜半こそ	二三
學問は	二八

夏は麻の衣を	二九
那須與市は	三〇
或人の庭見しが	三一
或人のいふ	三二
或人の賢きを舉げて	三三
ことわりなきが	三五
大なる松杉は	三五
諫は明かなる所より	三七
天が下の御事などを	三七
わが誠より	三八
聖の樂むてふことは	三九
昔の鎧と	四〇

いづ方に火ありと.....	四四
小松の内府が.....	四五
薬の病に應じて.....	四六
齒のかたきものありけり.....	四七
傍より言ふ事は.....	四八
詠歌大概に.....	四九
おのれ愚なれど.....	四九
花の咲く頃.....	五〇
戸ごとに富み.....	五一
三年四年門より.....	五二
何にかへじと思ふ.....	五二
神はわれなり.....	五三

山人の傳へし薬とて.....	五四
ある翁に.....	五六
四の時の.....	五七
いやしき者ありけるが.....	五七
大名といふ人たち.....	五八
雲の上のやんごとなき君.....	六〇
武氏のをり.....	六一
酒過ぐれば.....	六二
聖賢の道まねびて.....	六二
相州の日金の峯といふは.....	六三
道路は足底の廣さだにあらば.....	六四
目しひしもの.....	六五

あるやんごとなき人……………六五
 二人連れ立ちて……………六六
 今ここにては黒きを……………六八
 捕藹をもて……………六八
 ある醫師ありけり……………七〇
 ものを引きのばいて……………七一
 狐のよなくくるを……………七二
 禪意を得たりといふ者……………七三
 月なき夜半は……………七七
 人を責むるは……………七八
 楓の芽の紅なるに……………七九
 雨いささか降り續くと思へば……………八〇

草木やしなふ者の……………八一
 おほよそ躬行にてもあれ……………八二
 ある吝嗇なるもの……………八三
 文作り詩作らんと……………八四
 鳶の子のすだちする頃……………八五
 友に交る道は……………八七
 花の散るは……………八九
 ある人足の病ありて……………八九
 ある人庭好みて……………九〇
 櫻の花を鹽にし……………九二
 晴雨をよくあらかじめ言ふ者……………九四
 今の世畫を好むも……………九五

人並よりは聲高く……………九七
 閉藏の氣一度變じて……………九八
 孔子喪あるをり……………九九
 事に處するに……………一〇〇
 生れて物覺ゆる頃より……………一〇一
 時ありとてや梢より……………一〇二
 禍福は組み合ふ繩のごとなる……………一〇五
 ある山里ありけり……………一〇五
 年ふる鯉のありけり……………一〇七
 寢覺の里に行きて見れば……………一一〇
 山人をめづらしと人は言へど……………一一一
 田舎より出でたる今參りのをうな……………一一二

藤の花は……………一一四
 しうねさ深きは……………一一五
 深川の八幡の社の祭ある日……………一一五
 人を知るはかたよりなき處より……………一二七
 昔兩頭のくちなはありきと……………一一八
 政をなすも時と勢と位とを……………一二〇
 膽をねるといふは……………一二一
 今いふ費は……………一二二
 寒さを嫌ふものは……………一二四
 鷹の羽に棲む蟲ありけり……………一二五
 雨風の時たがへぬといふも……………一二七
 伊勢物語は梅の如く……………一二八

わが悪しきをば……………一二九

もろこしの君と臣との道は……………一二九

今日はいと長閑なり……………一三〇

目次終



花月草紙抄

序

久しう浦わの里に住める翁ありけり。めかり鹽焼く暇には、えうなき藻屑かいあつめて、しほやの窓の戸にかいはさみ置きたるを、世のえせものの取りて歸りにけり。またの年行きて見れば、こりずまにかいはさみ置きたり。かく白浪のよるくごとに敷も積みしかば、遂にこの巻がながしく書いたれば、それをもて名たてしは、かのえせ



もののせしことなりとぞ。「海人のさへづり」とこそ言はまほしけれ」と里の子は言ひき。

なしと聞けば

「なし」と聞けば「あり」と言はまほしく、「悪しき」と言ふをば「善き」とことかへて言はんこそ、いとねちけたる事なれ。櫻てふ花は我が國のものなるを、「唐國」にもあり」とてさまざま例など引き附くれど、櫻書いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、「なし」とこそ言ふべけれ。いでや櫻といはでしも、花とだに言へばこと木には紛れぬものを。ほのぼのと明け行く山際、雲か雪かとはばかり咲き満ちたるも、かすみこめたる夕間暮、花のけは

ひも朧に見えて、此處にのみ暮れ残すけしきなどいふは浅かりけり。まいて、うてなのびやかなれば近劣りする。などいふは、かのことかへてざえおふ心に言ふことなりかし。風に散りかふも、雨に濡るゝも、遠山に見るも、軒端に向ふも、曙も夕暮も、露のひるまも、めかるゝ時しなきをことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかたちもゆたけく、匂さへこちたからぬも、あやしきまでこそ覺ゆるものなれ。さるを「何處」にもあり」といふは更なり、「曙・夕暮」などと面白からんやうにことば添ふるは、いまだ深く染めし心にはあらざりけり。すべて、ことばもて言ひ盡さんと思ふは、いと浅き心かな。

月のさしのぼる頃

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるにや、匂ひそめたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一出で來たるが近寄るほど、あやにくに月の方より雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こはいかにせんとしばし打ちまもるに、雲の端つ方あかう見ゆるにぞ、出で離れたらばはやかゝらん隈あらじと思ふに、いつのまにかまた白雲の月待顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれて打見るに、はじめの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ち居たる雲

にむかへば、また馳せ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはてで見居たるうちに、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくと向ひ居たれば、心のはてなきやうに覺えしが。

久方の空に任せて

「久方の空に任せて、わがさゝやかなるざえを用ひざれ。」とはいへど、空に任するに深き心あるべし。星の光見ても、はや沖はあらしき風吹き出でつ。このあたりへは明日のひるつかた吹き來べし。といふことも知れば、心して乗るを、空に任す。とこそは言はぬ。沖の風吹くも吹かぬも問

はずして、今此處の波平かなればはや漕ぎ出でて行くを、
「空に任す」とは言はじ。物食ふものにてもあれ、すべて身
を養ふ道を盡し、その程を慎みて後、いきしにを空に任す
べきを、養のことは心とせず、たゞおのがほりする事にの
み随ひて、いきしにを空に任すといふ事もありぬべし。

雪の降りたるに

雪の降りたるに、小簾垂るゝも口惜しければ、かの高嶺の
雪は」と言ひたれば、何となううちゑみて、また立ちもやら
ず、さすがに捨てもおかで、わらべなんどに「あれ撥げ給へ
よ」などほのかに言ひしこそよけれ。いとをみなはか
かるべしとぞ。

○かの高嶺の
白樂天の詩句。
遺愛寺泉欵枕
聽。香爐峯雪撥
簾看。
○いとをみなは
清少納言の故事
思ふべし。

竹を好み愛づるも

竹を好み愛づるも、菊も蓮も、ことわりあることにはあら
ぬを、さまざまのことわり言ひて、ざえおふぞうるさき。
つくもむし嫌ふも、げぢく嫌ふも、何のことわりあるに
もあらずなん。

親のこの身を

「親のこの身を人となし給へる御惠、山よりも高く海より
も深し。またその親もわれも子等もかくながらふるは、君
の御惠なり」と言ふは浅かりけり。そのむくいにて、孝し
忠するものにはあらず。人知らぬ深山の梅の花とても

○竹を好み
王子猷は竹、陶
淵明は菊、周茂
叔は蓮を愛せ
り。

○山よりも高く
僧安然、童子教。
父徳者高山、須
彌山向、母徳
者深海、滄溟海
還淺。

○冤牛のこと
陶朱新錄。

司馬溫公冤牛
問、自跋曰、是
牛也、能捍虎於
其未寤之前、而
不_レ能_レ全_二其功
於虎行之後、其
見_レ殺宜哉。

○橋姫の巻
源氏物語。

薫らざるはなく、深谷の鶯とても啼かざるはなし。子と
なりては必ずかく、臣となりてはかくあるべき道は、もと
より人にそなはりたる事にて、鳥獸も親を慕ひ子をはぐ
くみ、冤牛のことさへ語り繼ぐものを。

霜夜をわびて

霜夜をわびて水鳥の鳴くを、物知顔なる人が「水鳥のさへ
づるよ。」と言ひしを、同じやうなる人打聞きて「鶯のさへづ
るなどとは聞けど、水鳥のといふは、いと物ごとにあらた
まり、珍しき事を聞きしかな。」といふ。初の人うそぶきな
がら、橋姫の巻に「水鳥の羽うちかはしておのがじしさへ
づる聲。」とあるものを。」と心得顔に言ひたるもわろし。も

○からう
河漏。

○雪螢あつめし
晉書、孫康傳。
孫康少清介、交
遊不雜、家貧無
_レ油、嘗映_レ雪讀
_レ書、後官至_二御
史大夫。
同書、車胤傳。
胤字武子、幼恭
勤博覽、貧不_二常
得_レ油、夏月以_二

とめて珍しきことを言ふべきものかは。「そばきりを好
み給ふや。」といふべきを、からうは如何に。」といへば、「からき
ものこそ好み侍れ。」といひしを問ひし人笑ひき。知るべ
き人には言ひもしなん、人をも知らでかやうのこと言ふ
は、暗き心より出づるなりと人のいひき。

かの人

「かの人、雪螢あつめし窓に年を積みて、ふみ見る道に心
を盡し侍るなり。されば、世の中の事にはいとく侍り。
といへば、さるこそ誠の道まねぶ人なりけれ。」と譽めもの
するものありとや。もとより道まねぶものは、五の常・五
の道よりして、人ををさめ己ををさむる道まねぶより外

五常。
在_二美體智
信。
玉飾。
君子。
父子。
夫婦。
長幼。
朋友。

練囊盛數十螢
火照書讀之、
以夜繼日、後
官至尙書郎。

のことはなし。されば、世の事にさどく、今のあたりのみ
かは、千年の先つ世の事、見ぬもろこしの昔今のさきより、
さかり衰ふるさざし、人の心の上より仕ふる道のくさぐ
さに至るまでも明かなること、道まねぶ人とは謂ふべけ
れ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人と
は謂ふべからんと。

ひでり續く頃は

ひでり續く頃は、こちかぜ吹きて雲の出でたるにぞ、さら
ば今日こそは降り出づらめと見るに、その風もいつしか
止みて、雲もむらくと斷間がちになれば、はや日の影の
きらめき出でぬ。また雨の降り續く頃は、松吹く風の音

○こよひの月夜
萬葉集、天智天
皇。
わたつみの豊旗
雲に入日さしこ
よひの月夜あき
らけくこそ。

○人麿
姓は柿本、山邊
赤人と共に歌聖
と稱せらる。持
統・文武の兩朝
に仕ふ。
○明石の浦の
古今集。
ほのくとかあ
しの浦の朝霧に
島がくれ行く舟
をしぞ思ふ。

ある人

いさぎよくて、はや霽れなんと見れば、雲間もはやむらむ
らと青く、入日の方はこちたきまで紅深く見ゆるにぞ、こ
よひの月夜明けくこそと思ふに、月出づる頃は雲出でて、
また玉水の音するものぞかし。代々の亂れ治るきはも、
わが心の上もこの如きものとかや。

ある人、人麿が「明石の浦の」といへる歌をめぐらしげに打
返し打誦して、「いかにも名歌なりけり」といふをかし。
一人がいふ、「この歌こそそのころの體にもあらずなん、撰
集にもまさしくそれとも書かず。何のおほん神の歌、何の
ぼさちの詠み給ひし歌などといふをも載せられたるた

○明石の浦
播磨國明石郡。

○筆
姓は小野、野相
公と稱せらる。
官左大辨に至
る。

ぐひもあれば、打ちまかせては、といふを、あななま、かくな
宣ひそ。わらははべもこの歌を人麿がなりといふものを。と
争ふもをかし。ことに、この歌は筆がなりとぞいふなる
よし、それとてもかゝる事は、かゝる人などに言はである
べきを。

×わが欲を

わが欲を欲もて防がんとするは、いと難し。「今日盃にひ
とつ酒飲まんよりは、明日は心に任せて飲ますべし。」とい
ふが如し。「この世ばかりの世なり。かの國には、よき音の
鳥よき色香の花よりして、など教ふるは、その國のおるか
なる民草のはかなき程も知られぬ。「かりの世とこの世

○祕閣
又、臂閣といふ。
字を書く時に臂
を置く。普通
には、天子の圖
書を藏する庫を
いふ。

をいはば、君と親との惠は何と人に答へん。とか詠みしも
ありとかや。

○この筆は

「この筆は、いとわろし。三度四度ものすれば、皆かぶろのや
うになりぬ。」とてとみに物書くをりは、墨もすらで硯の水
をかいまはし、書き果つれば、投げ置くにぞ、硯や祕閣のは
ざまなどに横たはりて、いつか尖もつりばりのやうにな
りて、かわきにかわきたるを、又惜しげなくたてざまに、干
瀉のあたりにて音出づるばかりにかいまはし、あるは齒
もて噛み碎き、又は墨もて筆の尖をおしひしぎて書きつ。
かくてはいかで命の長かるべき。よき筆をばまづかさ

とるもしづめてし、物書いたるあとにても洗ひものし、紙におしあて又はすかし見て、一筋も亂さじとして置くめり。いとど命の長かるべきことわりなり。はやくそじなんと思ふをば、いとあらあらしくなして、これ見給へ。三度四度にては、やかくなりきといふもをかし。

みやび好むもの

みやび好むもの今の世にいと多かれど、いづれを誠のみやびとは言ひも定めん。たゞ月を見、花を見るとても、いかで言はん。歌詠み漢詩作るとても、いかで言はん。今のみやびといふは、まづわが名を銜ひてんと思ふより、をかしと思はでも、いにしへ人の好みしものは物まねびし

○謝氏
晋の謝安。字は安石。少うして名あり。朝命屢と逼れども皆就かず。人爲に語つて曰く、安石出でずんば、當に蒼生を如何にすべきと。

て、それもて名得んことをのみ思へば、心にもあらぬことを詠みなし、あるは奈良の都のふる言を集めて作りなせど、詠みなす心の中は、今の世の末が末なるふりを改めず。かくて古にかへせりと思ふもあるべし。または世に仕ふる道をも他所にして、人に高ぶるみやびもありなん。なかには、謝氏とやらんの韻事に専なりしは、かの器といひ才といひ、世をも人をも治めものして、千歳の後も名をあらはすいさをあれば、よしよからぬ事のありとも、よきにくらぶれば物の數ならず。さるに、何のかぐはしさもあらで、只色に耽り酒に飲まれてかゝりありき、わがすべき事もせず、晋の世のみやびなりと思ふたぐひは言ふにも足らじ。たゞやんごとなき人は、花を看月を看ると

ても、いかで心のまゝにすべき。われ獨おもしろしとて、夜更くるまで月花の宴に耽らば、大炊殿のあたりは更なり、従者なんどをはじめとして、睡ることもえせじ。君はおそく寝ねば、おそくも起き出でなん、末つ方の者はなほ早く起き出でぬべしと思ひ遣りて、名残惜しくとも打捨てて、閨に入るをこそ、その程得しみやびとは謂ふべけれど、ことに、月花の宴とても、それをば他所にして、たはれたる事にのみ夜を明すなんどは、いふにも及ばずなん。いでや、武夫ならば、かの槊横たへて漢詩詠み、弓に矢はげて歌詠みしなんどは、誠の風流なるべし。皆わがすべき事もせず、わが程を知らで、いやしきものは高きまねびし、高きものは、はかなきすまるなんどのまねびし、漢詩作るも

○かの槊横たへて
魏の曹操・我が
朝の上杉謙信な
どをいふ。

○弓に矢はげて
源義家・安倍貞
任などをいふ。

○宇留馬
新羅の迁陵島。
今の蔚陵島。一
説に琉球。又一
説に臺灣。

のは、唐國の物商ふ賤にもあれ、宇留馬百濟の人も唐國に近しとてや、その書いたるものなど殊に尊ぶたぐひもあり、歌詠むものは、雲の上人ならばいつも名たゝる人のやうに覺えて、拙き歌をも寫しものして翫ぶもあるべし。又は古きもの集むとて、今の用あるものにかへても、用なきものを覓むるもありぬべし。みやびは花の薰なり。花と實とありて足りなん。されど、この薰ありてこそ梅は桃にまさりぬれ。

よく物を心にとめて

よく物を心にとめて忘れぬものが、昔いづこの山に登りしが、かゝる峯に松の幾本ありて、その中にかく枝垂れた

るに、いま一本は高く聳えて立てり。その傍に槿の大きやかなるが横ざまに生ひ出でて、青つゞら懸りしさまなどカウと語るに、「いとこまやかに覺え給ふものかな。君が庭も、その山によりてつくり給ひしか。松のある中に槿の見えたるが、姿はいかにありしか。」など尋ぬれば、「わが庭にも槿のありしか。つね見侍れば忘れたり。」といひき。

えみしの人に

えみしの人に飯を與へければ、いと喜びながらそこら食ひこぼしてけり。「やよ、米は玉の緒つなぐものなるを、などかくおろそかになすか。」といへば、「われ等は、米食ひて命をまたうするにはあらず、鮭といふいを食ひて生くるを。」

といふ。「さて、鮭のいにて命をばのぶるならば、それをば尊ぶべからん。いまその足に穿きたるものは、鮭の皮ならずや。」といへば、しばし頭かたぶけて、「君の足につけ給ふわらうづとやらんは、かの米の出でくる草にはあらずや。」といひしにぞ、「侮るまじきことよ。」と人のいひきとぞ。わが國の人は他所の事を知らねば、えぞ人のなりかたわが國の人とたがへば、いと愚にて何も知らぬものよと思ふたぐひぞ多き。それより唐國にてもあれ、えみしの人にててもあれ、たゞ姿の見馴れぬを見ては腹かゝへ、言葉のわきがたきを聞きては又笑ふ。「心せば、く他所見ぬ故なるべし。」といひぬ。

やまと歌は

○やまと歌は古今集序。やまと歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける。……力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ……○周勃といふ人沛の人。性木強にして敦厚、深く高祖の信任を得たり。呂氏の叛するや、陳平と俱に諸呂を捕へて、之を斬り、代王恒(文帝)を迎へて即位せしめ以て漢室を安んず。

「やまと歌は、人の心より天地鬼神をも感ぜしむ」などいふは、和歌に限ることにはあらず。たゞ一の誠もてこそ、大空をも動しつべけれ。漢の高祖の太子うごかすべき私の御心を、さまざまことわり盡して、人々諫むれどもうけがひ給はず。さるに、周勃といふ人が、口には言ひ得ねども、よからぬ事を知れば、「そのみことのりをば受けじ」といひし一言にて、さばかりの御心惑も晴れ給ひきとか。されば、よし詞の花を咲かせたりとも、誠の貫くにあらざれば、えうなき事なり。誠の貫きて詞の色もそなはりなば、いとど人の心をも動しやはらぎつべければ、一やうに、

「實だにあらば、花はなくてもありなん」とは言はじ。

越路の深山は

越路の深山はいと奥深くして、雨に水添ふとても、山のあひの谷河なれば、流とづれば山など崩れて災なせど、水はいと早く落つとぞ。その深山に棲めるをのこ、一年美濃國へ行きたりしに、雨いと降り續きてければ、人々堤に出でて水防ぐに、かのをのこは水防ぐ事も知らざれば、よねをいさゝか袋に入れて腰に着けるたり。「はやその堤も崩れぬ」と人々呼ばはれば、高浪漲りて流れ行く水の勢に目くるめきて、逃げ惑ふ隙もなきほどなり。かのをのこ、故郷にては左も右も山なれば、たゞちに打登りて、かのい

さゝかのよね食ひ盡さざるには、はや水落つる心ならひに、人よりしづめて打見るに、あるかぎり岡もなく山もなし。遂に押流されけりとぞ。

志五ありて

志五ありて智の七より以上のものは、必ずいさをしを成す。志五ありて智の五・六あるものは、いさをしを成すこともあれど、多くは敗をとるとかや。「智劣りて志厚きものは、時をも知らず、程をも辨へず、人をも識らで、わればかりゆるして、わが智の足らざるをも知らざるより、かゝるものよ。」と言ひきとや。

月の夜半こそ

「月の夜半こそ、思ふくまもなく心のそこも澄みわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、また優りぬるやうに覺ゆ。」といへば、「雨ぞいとまさりぬるを。」といふ。「いかに。」と問へば、「いでや、旱天の雨はさらなり、草木の花咲き實るも皆この恵にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそかのどやかに降りたるも、春待顔にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣濕せども降

るとは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、棲み捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき庭のおもの枯生の底に緑やゝ添ひ行くも、柳の絲のうごきもやらで露そふも、ともにいと長閑なり。燈火挑げても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄みわたりぬるものぞかし。その外梅が香のしめり夜深くにほひわたるも、『花にうし。』とかちぬるも哀はありけり。春も老い行くころ、蛙の時得顔にすだくもをか。杜鵑の初音をいかにと思ふ頃、村雨のはらくと降り出でたるも、五月雨の幾日も降り暮して、ふみの卷々繰返しつゝ居たれば、何となく世の中のことにも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬること、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹き落ち

たるに、柳蓮葉などの葉裏しろく見せたるもすゞし。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降りきて物音も聞えず、土のにはひきたるもいと心地よし。軒端は玉の簾垂懸けたらんやうに、玉水のたえまなく落ちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし又は水はしらせたるに、人々しばし物言はでうちまもり居たるもをか。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲のたち出でし方は、はや空のひとしほ碧に見えて虹など見ゆるに、木々のみどりの庭濼にかげ見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷の音におどろきて這ひ出でたるが、『今日のは若かりし時のごとよく霽れに

けり。今時のは、かく霽るゝこと稀なり。『なんどはや繰言いふもあり。』かれはかくあわてき。『などいひて、かたみに笑ひどよみつゝ。』今日は蚊も少かるべし。かみの音もいとかすかなり。このごろの暑さも忘れぬ。』とて端近う出づれば、夕月の光さしわたりて草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙のものまち顔に空うちならみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋くるころの雨は昨日にかはりて、何となうさびし。萩の上風、外山の鹿の音など、月よりも身に沁むこゝちぞする。常に聞き馴れし、笕の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいて、やゝ夜寒のころ鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕ちかく鳴き寄るもあはれなり。』この雨に木々

も染みなん。』と思へば、『葺などもおひ出でなん。粟もはや落つべし。』などと、わらはべの物さびしげに燈火にむかひつづ言ひ出づるも、げにさまさまなり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲、牙えて聞ゆるにぞ、鐘撞く人の心までもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染め添ふも、白菊のうつり行きて一盛見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきづきし。朝顔のみな枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、ひる過ぐるまで萎みおくれたる、又あはれなり。野分の風はおどろくしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀を添ふるは秋のならひなるべし。時雨のさと音して夕日に白く降りくる

も、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、あはれ深きものには侍らずや」といへば、かうやうに云ひ竝べては、げにもと言ふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつ日より降り出でしをと思ふ心はかはらじ」と心の中に思ひて聞き居しも、またをかしかりけり。

學問は

「學問は人の道まねぶことなり。漢詩作り文作るはせんなし」とよく人の言ふことなれど、みやびは花の薫の如く、物の潤の如し。まいて、かの國の文字をおぼえて書讀むとも、文字のつかひざまにて深き淺さのたがひめあるもの

にて、かの國の人のことは知り得難かんめれど、さすがに漢詩作り文作れば、おのづから詞の外なる心をも得るものとかや聞きぬ。されば、なすには如かじかし。などで之を禁ずべき。

夏は麻の衣を

「夏は麻の衣を着るべし。冬は綿入れし衣重ぬべし」といふはことわりなり。されど、伏陰あるをりは、夏も綿入れし衣着ることもあるべし。冬も熱陽あるをりは、ひとへあはせの衣をも着るべし。さるを、ことわりの如くせば、また病をも得べし。今の世、たゞに理のみいひて、國を治め人を治めんとするものは、かゝる事やあらん。

○伏陰
夏時となるも、
なほ陰氣滯伏
し、發して霜雹
あるの類。

那須與市は

「那須與市は弓の上手にてもあるべけれど、馬を海に乗入れて、風にうごきて定らぬ扇を射んといふは、いと難きことなり。射損じなば死ぬべしといふも、さもあるべき心なるべし。たゞ扇にのみ心ありて放ちたりとて、必ず中るべしとも言ひ難かるべし。さるに、心にたちかへりて神に祈念したるにて、心はうちにとゞまりて外へ馳せず、つひに思ふ矢つばたがはざりしは、わが心の誠へかへりて神明・良能の妙の出でしなり。」と言ひしが、さあらん事もありぬべし。

或人の庭見しが

或人の庭見しが、松の枝をため葉をすかし、一草一本皆作り立ててけり。まして、石などはさまさまの色あるをも竝べ分け、大なるも小なるも、たゞずまひをかしくなしたるを、翁殊に譽めにけり。かへりて後に、「翁の常に好み給ふは、草は階前よりたちのび、松も檜ばらもおのがまゝになしおき給ふかと思へば、今日の庭をば殊に譽め給ふはいかに。」と問ふ。「何もさせることわりなし。世の人わが好む所に合ふものをば譽めのよしり、心に合はぬものをば譏りなどすれど、ことわり盡して思ふにはあらず。茶たつること好むものは、碁など圍むものを見て、惜しき月日を

○木野狐
碁盤の異稱。
拵掌録。
人目「棋枰」爲
木野狐、言其
媚惑人一如狐
也。

空しくし給ふ。木野狐の名を忘れ給へりや。』などいへど、茶
たつるも一時の心やりにて、よきあしき言ふべき品もな
し。いで、この庭といへば、室町のころの庭の残れるを見て
も知るべし。野山の景色なすも亦假に作りなしなり。實
にさまさまの石など面白かれとなしたるは、面白からぬ
やうもなし。翁が庭はといへば、おのがまゝになすにて、古
の庭などのこととも違へば、心高きわけもなし。くれなる
むらさきの色よしとて賞しぬれど、衣にして翁など着ま
ほしとは思はざるなり。わが心にたがへば譏るは、皆こと
わり知らぬものとする事にや。』

或人のいふ

或人のいふ、われは劍難の相ありと言ふものあり。いかに
して劍難をのがれ侍らん。翁のいふ、武士の劍難の相あ
るは、いとたのもしき事なり。たゞ忠孝仁義の道に違はざ
るのみ。楠木正成も劍難なり、熊阪長範も同じ相なるべし。
正成御門の召に應ぜず、逃げ隠れなば、劍難にも遁れん。さ
れど、たれか賢人・忠臣の名をもて賞すべき。觀相は拙きわ
ざなり。聖人の中道、いづこにかさはるべき、いづこの道か
優りなん。』

或人の賢きを舉げて

或人の、賢きを舉げて政を任ずる外に、國を治むる道はな
し。』と事もなげに言ふを聞きて、いかにさは言ひ給ふぞ。わ

○延喜の御門
醍醐天皇

○三代

夏、殷、周。

○蘇とかいふ人

十八史略。

堯立七十年、有

九年之水。使

蘇治之、九載弗

績。

○管、蔡の君のわ

ざはひせられて

十八史略。

武王崩、太子立

是爲成王。成

王幼、周公位、家

宰攝政。管

叔、蔡叔流言曰、

公將不利於

孺子。與武庚

爲亂。

が國の御門多き中にも、延喜の御門をこそ聖の代と今にもいへど、菅原のおほちぎの事なども聞ゆるぞかし。はたち餘の代を積みしがうちの、唐國の御門の多きが中にも、かゝる人をいかで用ひ給はざりけん、この人を用ひ給ひし故に遂にかゝる事出で來にけりなどいふことも絶えぬぞかし。堯、舜、三代の初にはもとより聞えねども、それも後の世の如くくはしく記し傳ふる書あらば、また後々の沙汰もありぬべし。はやそれにも蘇とかいふ人を用ひて、その職にかなはずりし事も、管、蔡の君のわざはひせられて、聖のしばし濡衣着給ひし事もありしぞかし。さるに、君はたゞ賢き人を用ひて任せよと事もなげにいひ給ふは、聖にもまさりぬと思ひ給ふか。事のあとより見るが如

○人を知るの

書經、皋陶謨。

皋陶曰、都在知

人、在安民。

禹曰、吁成若

時、惟帝其難

之、知人則哲。

能官人、安民

則惠。黎民懷

之、能哲而惠、

何憂乎驩兜、何

遷乎有苗、何畏

乎巧言令色孔

壬。

くならば、「人を知るの難き。」などとは言ひ置き給はじ。

ことわりなきが

ことわりなきが、ことわりのまことなり。ことわりのごと行はるゝものならば、何の難き事もあらじを、さも知らず、人と争ひ政を誹りなどして、たかぶる者はことわりのまことを知らぬとやいふらん。

大なる松杉は

「大なる松杉はさゝやかなる岡には生ひ出でず。わらはべ何を知らん。」などおもふ心より、幼き者のいふ事なす事打聞きては、驚き感ずれど、皆人なみの事にて、年たけし者は

○寂然不動
易經、繫辭上傳、
易无思也、无
爲也、寂然不
動、感而遂通天
下之故。

もとより遙に優れど、さあるべき事と思へば、感すべき事
も感ぜずなん。 ぞえある人の佛の道など信ずるは、佛の
道は聖の道より高きにもあらず、明かなるにもあらねど、
佛たちのよくはかゝる事知りけりと思ふより、驚き感ず
るもあるべし。 かの不動智とやらんを世になき高きこ
とと言へど、いつか「寂然不動天下の故に通ず」てふこと、聖
の書にもあるを味はずや。 すべて、悔る心よりわざはひ
を受くと知るべし。 古の英明の御門をはじめすぐれた
る人等、をみなわらべに誑されて、後には制することも力
及ばで、亂るゝはしを知りつゝ、うちもだし居りし人もあ
りけり。 これもかの「いかで知らん」と悔るがゆゑに、いつ
かかくはなるとや。

諫は明かなる所より

諫は明かなる所より入る。 讒は暗き所より入る。 たゞ
代々の御門のほりする所の心のまゝならぬものは、わが
身とわが名との二なり。 その二をそこねんと聞かば、い
とおそろしく思ふべらなり。 かのその暗き所より入れ
ば、つひに賢も疑はれなどすとかや。

天が下の御事などを

天が下の御事などを、さまざま心にかけ心碎くさまに語
るものありけり。「君は妻に子に持ち給ふが、をりく妻
は君と争ひ、その子もかたみに墻に闚ぐに、君もあまねき

○墻に闚ぐ
詩經小雅
兄弟閱于墻、外
禦其務。

心にはあらずや。子を見給ふにも深き浅きのかはりあるは、他所より見てだになにくれと言ふとぞ。さよやかなる家のうちも治らず、今日の煙も立て得ずとなん聞きぬる。みづからを思ひ給ふの浅きにや。打ちまかせて言はば、いづこを見る心も皆深からずや。よく言には出し給ふ。かの『憂國の心あるべし、憂國の語あるべからず』とも聞けり。言に出すは心の深きにはあらじとか。

わが誠より

「わが誠より貫き出づれば、見ざる事も見え、聞かざる事も聞ゆめり」といふは、いと至りしことにて、それをばかのくしの君も、六十にて耳順ふ」とも宣へりしぞかし。さるに、

〇くし
孔子。

〇六十にして
論語爲政篇。
吾十有五而志
于學、三十而
立、四十而不
惑、五十而知
天命、六十而耳
順、七十而從心
所欲、不踰矩。

わが輩の色に染み香にめづる心は更なり、いさゝかもほりする心あれば誠をおほふにぞ、その境に到ることなき。弓射る道を得てかの妙なる奥意得し者は、弓には誠のほしをも得べし。弓に得きとて、それをもて馬に乗るべしと思ふべけんや。皆道知らぬより、たやすからぬ事をたやすきやうに言ふかと言ひき。

聖の樂むてふことは

聖の樂むてふことは、天地の心なり。天地の心は常に春なれば、いつものどけからぬことなし。苦しきを樂むにはあらず。苦しきは苦しく、嬉しきは嬉しきに外なけれど、たゞ哀・樂・喜・怒の四も、皆樂の哀、樂の怒にて、いはば、秋は

春の肅殺、冬は春の閉藏なりといふに同じこととなん思ふとなり。

昔の鎧と

「昔の鎧と今のとは、いかでかくまでは違ひしにか」と問ふ人のありけり。「このわかちは、代々の昔のふりをよく心得ぬれば明かなるを、さはせて、軍といへば元龜・天正の頃の近きことのみ聞き覚え、昔の事書いたるをば、かゝる事ありしか」など夢物語のやうに心得て、かの甲斐國のなにとか云ふ人の記せるものと偽り言ひしを、まこととして、今の鎧のよきなど思ふたぐひぞ多かる。まづ、古の軍は一人一人道のみがき、名ををしみ、譽を後に傳へんことのみ

○元龜天正
正親町天皇の御
宇（織、豊時代）
の年號

思へば、みおやの事より言ひ出で、みづからの名を呼ばはりて出づれば、敵の方よりも劣らじとおなじく名乗りて出で合ふなり。されば、かたみに物音もせず、目のごひてこれを見る、その打合ふなかに、「いで組まん」ところかけてうち物棄てて寄來れば、力かひなくして必ず勝ち難からんと思ひても、さいふ時に組までは名を汚すにぞ、命棄つる道に二はなしと思ひきはめて、おのれも打物棄てて組合ふなり。組みしかれて首取らるゝまでも、しづまりかへりて見ることなり。敵より組まんとて打物棄てたるところを斬らば、たやすく斬り得べけれど、名けがれては武夫のうち立ち難く、殊に必ず罪せらるべし。されば、遠矢に大將など射るも、るやなき事なれば、それがために聲かけ

てのちに射ることなり。かゝればこそ、代々譲り傳へてし
 鎧をも着、いさゝかも後に名を残さんと心ことに引繕ひ、
 これぞ最期の軍と思へば、身におはぬ直垂まで請ひ得て
 ましと思ふ心のみなれば、鎧もいまの如くことそげたる
 ことはせざりしなり。そのふりもやゝ衰へてより、馬を射
 て敵を討止めんともし、あざむきたぶらかしても勝ちて
 んとするより、多くの人とりこめて討ちしことも、後より
 ひそかに來りて討止めしこともありしなり。ゆゑに、昔は
 鎧の弓手のかたと前のかたとばかり心こめて作りしが、
 源平の頃よりははや前も後もひまなかれと作り立て、兜
 の鉢もまへうしろ同じくつくりなせるをもて、その時世
 を見ることにとまでもなりにけり。それよりして、南北朝の

○相生

さうしやう。
 五行の運行に
 て、木より火を、
 火より土を、土
 より金を、金よ
 り水を、水より
 木を生ずといふ
 こと。

○七星

日、月、歳星、
 彗星、填星、太
 白、辰星。

○五行

木火土金水。

比よりは愈みだれたるふりになりてけり。室町の比に至
 りては、華奢よりして高上のことわりをも加へ、かの相生
 相對などいふより七星、五行の數などに引きかけて、こと
 むづかしく言ひもしたり。田舎の武士ども皆まづしきに、
 作りなすものなく、物具かゝやかす力もなく、京風の華
 奢、高上なるをあしざまにいひて、『軍とてまた命棄つる
 のみにて難いこともなきものを、さまざまの絨毛の鎧な
 どいと女々しき事よ。』とて吹返もひねりかへしとかいふ
 になし、中には鎧も着ず、澁染の羽織てふものなど肩にか
 けて出づるを、いと高く潔きことのやうに覺えて、『まこと
 の士はかくよ。』といふさまになりけり。それより、そのこ
 ろの大將の鎧のいとやしきを後に見て、『大將と見受け

られざるやうに、雑人にひとしきを着給ふものなり。』とあまりなる事にまで、言ふことにはなりにけり。すべて、世の中のならはしのくだりもて行きしことをば、これを見てもかれを見ても知るべし。』と答へきとぞ。

いづ方に火ありと

いづ方に火ありと聞きても、ありあふ調度なんど繩に結びつけて井の中へ入れつ。水に入れ難きものは袋やうのものへ打入れて、傍去らずおきぬ。『火のかく遠きを、いかでさはし給ふ。』といへば、『焼け行かば、遠きも近くなりぬべし。』といふ。『風よければ、此方へは來らじ。』といへば、『風かはりなば、さはあらじ。』といふ。人皆笑ひぬ。ある日いと

をちかたのなりしが、風とみに吹き出でてまたくうち
に焼けひろがり、かの男のあたりも焼け失せぬ。火しづ
まりて近きあたりの者ら、『物食はんとしても器もなし。』と
なげけば、かの男したり顔にて、『貸して參らせん。』とてかの
繩を引手繰れば、鍔よ櫛よなどいふもの引き上げつ。ま
た袋のうちより器物など出しつと、『つねづね笑はれずば、
いかでかよる時ほまれしつべき。』と言ひしを、『げにも』と言
ひし人もありきとぞ。

小松の内府が

『小松の内府が、平氏の衰へ行くを見んよりはとて、『はやく
この世去りてん。』と願ひきと書いたれど、なほながらへて

○はやくこの世去
りてん
平家物語。
…榮耀又一期

を限つて、後昆
恥に及ぶべくば
重盛が命を縮
めて、來世の苦
輪を助け給へ。
……

平氏のならんはてをも見、力の及ぶだけはあやまちを救ひて、諫め止めつべきを、はやくこの世去らんと思ひしは、げに薄き心なるべし。例の浮屠氏のあとより言ひたることなるべし。」と人のいひき。

薬の病に應じて

薬の病に應じてその人の運よき折は、飲みくだすより心地よく覺ゆるものなり。運あしき時は、その薬飲めば或は痰にさはり、又はけのぼりなどして、病因の外なることにさはり出で來るなり。押して用ふれば、いさを爲す薬病に應ぜず。その人運よければ、忽ちそのさはり見ゆ。運あしければ、そのさはり見えず。必ずしばしよきやう

に見ゆるは、病の沈みて俄に災をなさず、たゞその枝葉のうれひ癒ゆるやうに見ゆるなり。救ひ難きに至りて、人「かの薬應ぜざるよ。」といふ。これも亦薬のみかは。

齒のかたきものありけり

齒のかたきものありけり。石など噛み砕くを譽のごと思ひにけり。一人のをのこは、生れてより齒やはらかに、て、かたきもの噛むこともせず。さるに、かの石砕くをのこ、齒の一、脹れ痛みければ、この一の齒のために物食ふことも快からず。」とて物をうちあててその齒を抜きけり。それより「また昔へかへりぬ。」とて石など噛み砕きければ、人も皆譽めのよしりたるが、一年もたゞざるに、かのうち

あてし隣の齒、ことに脹れ痛みて抜けたれば、ひだりみぎの齒又抜けて、つひに半は落ちてけり。残ると見るも動きゆるぎて、なきに劣るさましてけり。かの生れてよりやはらかなる齒の男は、「今にかはらず齒一も落ちず」とて人も笑ひにけり。

傍より言ふ事は

傍より言ふ事は、いとよくあたるものなり。「かの人には衰へ給ひき」といへど、鏡見てもさは思はず。「かれは今かくすれど、後には悔い思ふべし」などいへど、知らざるものぞかし。私の心だに、なくば、傍にて見ると同じかるべし。

詠歌大概に

詠歌大概に、情は新しきを先にすといふ事を何くれと言へど、こはかの日々に新なりといふ心ばへにて、流るゝ水の如し。されば、よきをあしく、あしきをよくなど引違へていふは、珍しきにて新しきとはいはじ。花を雪と見、雪を花と見る、幾度いふともわがまことより言へば、いつも新し。心してわざといふは、新しきといふものならず。

おのれ愚なれど

「おのれ愚なれど、親に孝し君に忠することは知れり。されば、べちに書見ることあらず。たれかこの二の道を知ら

○詠歌大概
藤原定家の著
○日々に新なり
大學。
湯之盤銘曰、苟
日新、日々新、
又日新。

○かの曾子とやら
 んの
 家語六本篇。
 曾子耘瓜、誤
 斬其根、曾哲
 怒、建大杖以
 擊其背、曾子仆
 地、而不知人
 久之、有頃乃
 蘇、孔子聞之怒
 曰、今參事父、
 委身以待暴
 怒、殫而不避、
 既身死、而陷父
 於不義、其不孝
 孰大焉。
 ○ふけう
 不孝。

ざらん」といふは、いと知らぬなり。かの曾子とやらんの賢き人も、打たるゝ杖によて、おもきふけうとなりし事を知らざるたぐひもありけり。まして、君を輔け國を治むるは、忠のおもきものなり。たゞに又あしきこと諫め、よきことを勧むとて、その諫むるにもさまざまの程も道もあるべし。そのよきのあしきといふも、かうやうの淺しき人、よきといふも必ずよきものかは。あしきといふも。

花の咲く頃

花の咲く頃雨降り出でたるに、風さへ添ひぬれば、必ず花の時雨風のうさ添ふならひにて、人の世の別れ離るゝこ

とわり見することこそ。さりとは、つらき雨かな、うき風かな」といふを聞きて、「雨降るとて、五月雨のやうにはあらず、はげしとて夕立のやうにはあらず。風添ふとて、秋の末つ方の野分または木枯のやうにはあらぬものを、花を惜めば、ことさらに雨も風も世になきやうに思ひ給ふか」といひき。

戸ごとに富み

「戸ごとに富み家ごとに足る」などといふは、いかなることにかあらんといふに、風俗質朴にして上下の制あるをいふ。おのゝその分を守らず奢に流れて行かば、みつきもの皆民に與ふとも、富み足ることはあらじかし。

三年四年門より

三年四年門より出づることなく、夜もねで書のみ見居たりしが、つひに病出で來にけり。「書見るは病のもとなれば、われはせず」といへば、「君は酒飲み過ぎて病出で來たる人を見て、酒止め給ふか」といひき。

何にかへじと思ふ

何にかへじと思ふみどり子の這ひ廻るを見て、げにこの子は行末ぎえも秀でぬべし。乳房見すればひたすらに這ひ行くめり。心にさからふことあれば、ありあふものにて人を打つ。わがこの頭の疵を見給へ。この子の煙管もて打

ちし痕なり。親とても心にたがへば、かくするぞ心のすなほにはある。年のほどより力もありて、この疵をいでかしにけり。」と痕おし撫でて譽めぬるを、愚なるものも笑ひにけり。笑ふ人よりは賢き人なるが。

神はわれなり

「神はわれなり、外にもとむべからず」といひたる人に、「そは、かの剝の卦に、『陰もまたしかり、聖人いはざるなり。』とことわられしは、いまだ至り深からざりしにや」といふが如くにこそ。いで、「神はわれなり。」と思ひ給ふならば、またよく思ひて見給へ。わが如く色に染みたる神ありや、酒好みて程知らぬ神ありや、見るものに奪はれ、聞くことに心とられ、

人に欺かれても知らざる神ありや。たゞ「神は人なり、われは神なり。」といふは、いとやすかめれど、正しく直き神徳の曇ることなく、照らさざることなきを得て後にこそ。

山人の傳へし薬とて

山人の傳へし薬とて、いと耳のさとくなるを持ち傳へたるありけり。耳うときものが、今言ひ給ふことは何ぞ。と二度三度問ひ直せば、人も笑ひて言ひもせぬさまなり。聞えぬまゝに打黙し居れば、また笑ふさまはさすがに見ゆめり。あまりのはづかしさに、かの薬こひうけて飲みしかば、俄に耳いとさとなりしは嬉しきものから、あまりに他所の他所の事までも洩るゝことなく聞えけり。

よね炊ぐ男が、この飯に蟲の這ひ入りたるが、言はばむづかり給はんのおそろしさに、密に取捨てけり。といとひそかに言ふもはや聞ゆ。知らぬさますれど、潔疾あれば、聞けばいと厭ふ心ありて箸もとらねば、又かの男等が囁して、よべ酒の過ぎ給ひつらんと思ひしが、果して見入れもし給はぬなり。いざかたみに今日は多くたうべ侍らん。うれしや。など言ふも聞えぬ。にくさ限なきものから、聞きぬ。ともはた言ひ難し。まいて隣の物語には聞き苦しきことも多く、此處や彼處の詞より鳥の聲、蟲の音をちこち洩さず聞ゆれば、かしがましと言ふばかりなくて、耳ほどうるさきものはあらじ。とうとかりし世を戀ひきとかや。

ある翁に

ある翁に、「かの人はいかなる人にか」と問へば、「いとよき人なり」と答ふ。「かれは」といへば、「よき人」といふ。必ずかれをばあしきといはんを選びて尋ね見るに、「よき人」と答ふ。「いかなることぞ」と尋ねしに、「人を見るには、まづ十にして五ばかりもよき事あるは、いとよき人と見るべし。十にして一・二もよき事あるは、よき人なり。十にして皆あしきをば、あしきと心得給へ」といひきとぞ。こは人をかく見るなり、われを見るの道にあらず。よきもあしきも、軽きと重きとのわかちもあらんかし。

四の時の

四の時のうつり行く景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるをりの花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふは、いとくるし。散れば又こん年は咲きぬべし。いかに心を苦むとも、霜白く氷堅きをりに蓮の咲くべきことわりなし。されど、咲くを待ち散るを惜むは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

いやしき者なりけるが

いやしき者なりけるが、常食ふべき米をも食はず、ひさぎて黄金にかへて、命にもかへじと袋に入れて持ち居たる

に、秋の末つ方にはかの水出でにければ、かの袋をくびにかけて高き所へ行かんとするに、はや水嵩たかくて行くべきやうなければ、せん方なく木に攀ち登りけるが、ことの外に飢にのぞみけり。さるに、米いさゝか苞にし負ひて水遊ぶ者を見て、かの袋の黄金を見せて、「これを皆まゐらせん。その負ふ所の米いさゝか分けて給はれ」といへば、いと怒りて、「にくきをのこの言ひざまかな。かゝる時黄金もちて何にかはせん」と言棄て、遊ぎ行きけりとなり。

大名といふ人たち

大名といふ人たちつどひ物語し給ひける時、一人の君の言ひ給ふ、手よく書く人あらば、一二百石の地與へ給ふか。

弓馬の道稀なるばかり得てし人あらば、千石ばかりの地與へ給ふか。さへも秀で文の道より武夫の道みな至れるといはば、一萬石の地を與へ給はんか」といへば、「昔はさなにいふ事もありけらし。今は何處にてもさすべしとは覺えず」と答へ給ふ。「さらば、このまどゐのうちの君たち、文の道人に優れ給ふもありや、武夫の道もありやと思へば、人並には嗜み給へど、秀でしことは聞き侍らず。いかゞあらん」といへば、「いかにも秀でしなどいふ事は、一ふしもなし」と答へ給ふ。「初の物にすぐれし者とても、一二百の地だに與へかねたるが、わが輩のあるは十萬石、あるは二十萬石の地を賜ふは、いかなることと思ひ給ふか。たゞにみおやのいさをと大君のゆたけき大なる御惠となり。しか

るに、生れしよりかく尊きものとのみ思ひて、なほいやましに位・官も人に超えんとし、大路ありくいであちも、わが格よりも高く、わが家の定よりもみやびやかにと、市のわらべの譽めなんことをほりするのみにて、内に省る心のなきは、いとうたてし。と言ひ給ひきとかや。

雲の上のやんごとなき君

雲の上のやんごとなき君おはしましけり。その御子の御傍にましましけるが、外面より風の吹き来て燈火の光定らざりければ、人召して、風の吹き来るぞ。燈火消えなん。さうじたてよ。と言ひ給ひければ、父君ことに怒り給ひて、「さやうなることばづかひしては、歌はいかでか詠むべき。」

とてむづかり給へば、御子はいと恐れてしぞき給へり。御次に居たるもの、いかゞしたる御教ぞと思ひて、御色うかゞひて問ひ奉りければ、「物を盡して言ふべきものにはあらず。」と宣ひきとぞ。

武氏のをり

「武氏のをり狄仁潔などのつかへざまは、かくあらざれば唐室保ちがたきを、知りてこそありけれ。されどもしその中興せざらば阿り諛ひし人とのみ言はれなん。」といふものに、呂尙が釣垂れてかの奇遇なくば、釣垂れし翁と呼ばれん。たゞその時にあひてかく爲すなり。かゝらば後に何と言ひて、わがざえをも知られん。」とその人たちいかで思

○狄仁潔
字は懷英。太原の人。官を以て委曲、武后に請ひ政を選さしむ。薦むる所の張柬之・姚宗等皆中興の名臣たり。或人之に謂つて曰く、天下の桃李盡く公の門に在りと。公曰く、賢を薦む

るは國の爲なり、私の爲に非すと。

ふべき。これらは凡智もて不凡の人の心を論ずるなり。といひき。

酒過ぐれば

酒過ぐればいよく飲ままほしく、行ゆるめばいよく亂る。わざはひ臨めば、自らうながすものとかや聞きぬ。

聖賢の道まねびて

聖賢の道まねびて唐土の書など好む者が、ふと禪家の法語など見て、遂にそれに耽るものありけり。ある人の、今珍しく信じ給ふは、道體性理のことに盡したるには心もとめず、日のあかきを常として、燈火の力をたふとむ類なり。

り。それもまこととは、かの良智にて聖の書見れば、心にかゝりてはづかしさのおきどころなければ、かの法語など見て心をおのれとなだむるなり。と言ひしはをかし。

相州の日金の峯といふは

相州の日金の峯といふは、いと高き山にて十州を見るといふ。ある人登らんとするよべ、かみなりはためきて雨は水零す如くなりしが、夜明くる頃は忘るゝばかり晴れて、霧もなく霞もなし。かの峯に登りたれば、七の島々も手にとるばかり見えて、八丈の島のあなたも鏡もて照しなば、かの人なき島とかいふをも見つべく、覺えしを、そのもの、この峯に立ち居て、こゝに家建てたらば、かのえみし

○日金の峯
日金山。伊豆國田方郡。伊豆山の西嶺にして、箱根山脈の一峰。天氣晴朗の日には、十州、五島を望見し得べし。世に十國峠といふ。

の船々今は八丈に來りけりと、事もなく見ゆめり。さるをこゝの岸に早船並べて、此處や彼處に知らせんはいかにぞや」といふ。『かゝる晴れし日は一年に稀なるを、その日に必ずえみしの船來るべしや』と言はまほしけれど、しれたる事言ひて争はんはと念じて居き」と語りけり。

道路は足底の廣さだにあらば

「道路は足底の廣さだにあらば、あゆむべし」といふは、例のことわりのみなり。いかであゆむべからん。梁の上をあゆまば落ちぬべし。こは、かの陳氏の言ひたる餘地なきなり。あまりに事にはなはだしく物にせちなれば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物に對して餘地

○かの陳氏の顔氏家訓。人足所履、不_レ過_二數寸_一、然而_レ咫尺之途、必顛_二蹶於崖岸_一、拱抱_二之梁_一、每沈_二溺於川谷_一者、何哉、爲_二其傍無_二餘地_一故也。

なきなりと聞きぬ。

目しひしものの

目しひしものの人の言ひ難きことをも言ふは、色も見えず、氣色にも知らねば言ふなりけり。暗き人は、わがあしきも見えねばよきと心得て、人に恥ぢざるは目しひし人の類なり。されば、古より「おもてにかきす」などとも言ふめり。

あるやんごとなき人

あるやんごとなき人、旅の道は早く寝ねて疲をだにやすめなば、下が下までも憂きことはあらじ。されば、早くやど

○おもてにかきす書經周官篇。不_レ學牆面、在_レ事惟煩。論語陽貨篇。人而不_レ爲_二周南_一、其猶_二正牆面立_一也與。

りを立出でて早くやどりに着くには如かず。これぞ下を
恵むの道なれば、喜びぬべし。といひけり。さてその君早
くやどりに着きて、格子おろし燈出して、晝の半頃より寢
ぬれど、下の者はわが心のまゝならず、人の寝ぬる頃なら
では寝ね難し。殊に晝の中はさわがしく道行く人も絶
えぬを、世の人に背きてよるなりけり。とも言ひ難く、寝ね
んとする頃、その君ははや供そろへて立つめり。下をあ
はれむ心はあれど、上の心もて下を視るよりかくは違ふ
なり。めぐむ心ありて下の事知らねば、かくぞありける。

二人連れ立ちて

二人連れ立ちて相見る人にあひて、君の仰によて、こたび

旅立つ事あり。いかに侍らん。見給へ。といひしに、相者見終
りて、二人とも必ず旅にて難あらん。慎み給へ。といひぬ。
一人は、いそぎの御事なれど、旅の道にて難あらば、おのづ
から君の仰も滞るべし。遅くとも難なきに如かじ。と燈火
消つ頃宿を出で、日の暮るゝ頃には宿りをとる。一人は、
「殿の御使なり、慎むとは君命を慎むに如かじ。この身はた
とひ難に遭ふとていかがはせん。」とて星を戴きて宿りを
出で、燈とりて宿をとる。されば、ことに早く思ふ方に着
きければ、君よりも賞を得たり。一人の方は、遅し。とて罪
にあひにけり。されば、相はともあれ、わがすべき所をつ
とむれば、難なきものよ。と言ひてけり。

今こゝにては黒きを

「今はこゝにて黒きを鈴蟲といひ、柿の核のごとなるを松蟲といへど、もとはりんく」と鳴くは松にて、ちんちろりと鳴くは鈴なるを、あやまりにけり」ともいふ。 蟲賣る方へ行きて松の方を得んと思へば、「鈴の方を」といふなり。 一人一人に、「こはあやまりなり、黒き方は松蟲なり」と教ふとも、皆それと違へば、賣る者もせん方なかるべし。 行燈を提燈といはまほしくとも、いかがはせん。 これも誤にならひてこそ世に行はるれ。

捕虜をもて

○けみきやう
顕微鏡

「捕虜をもて蠅といふ蟲を多く捕りたるを、ふとけみきやうとて眼も及ばぬ物を見る眼鏡のあれば、それも見しに、その捕虜につきたる蠅が逃げんとして羽を動かすが、はてはその羽も捕虜につきて動きえず。かうべ動かして苦むもあり。又久しくつきしは、飢にのぞみて弱り死するけしきもあり。たゞに羽を鳴らす音のみ聞きしが、よく見ればいと悲しきさまなりき」と語るを、さあらんよ。など人の答へしを、見しと聞きしとはいと違ふものぞかし。見し如く聞き給はば、「さあらん。」などとばかりは言ひ給はじ。まいて眼の及ばぬあたりの事は、なほ心にて見給へかし」と言ひし者のありけり。

ある醫師ありけり

ある醫師ありけり。病む者あれば、かみしも選まざいとせちに心を盡しけり。いといたう賤しき者病めるありけり。薬箱出して薬調ずるに、その母なりける老婆のつくづくと見て居しが、いざり出でて、「はゞかりなる事ながら、ねぎおもふ事にこそ侍れ」とていと言ひかねたるを、「何の事にもあれ、思ふことは打ちあらはして言ひね」といへば、つゝましげに聲ふるはして、「下に組み置き給ふ箱の御薬も賜はれかし」と言ひけるにぞ、思はずほゝゑみて、「さらば與へん」とて下にありしがうちの障なき薬二三取出でて調ぜしが、「必ずその薬はしるじあるべし」と語りぬ。

かくおろかなる者に、「この病には何といふ方劑調ずることなり。それは何々の薬を用ふ。この箱の上の方におのづから入れ置きたれば、取り出して調ぜしなり。下に組みたる箱のとて貴き賤しきの隔なし」とまめだちて言ふとも、いかで聞き分くべき。さはりなくば、その心に任するにこそ、をかしかりけれ。

ものを引きのばいで

ものを引きのばいて時失ふ者ありけり。人の早苗植うる頃、種子ほどこしてけり。葉月の頃、早稲の穂の出でたるに嵐吹きてければ、「花散りぬ」となげくを、「あまりにもいそぎし給へばこそあれ。わが稲はこの頃植ゑしかば、嵐

の災にもあひ待らず」と人にたかぶりけり。人の刈り收むるころ、少しばかり穂の見えたるが、はや霜のおきてければ皆枯れぬ。「今年はいと早う霜のおきしなり」とて年をのみ罪して、いまだ悟らざりきとなり。

狐のよなくくるを

狐のよなくくるを、必ず餌與ふる者ありけり。「かれは獸のうちにてぞえあるものなれば、かくしなば、かれも恵を知りて報ゆることもありなん」とて日ごとに怠らず與ふれば、かれも馴れに馴れてけり。ある日うまご生れてければ、いと事しげさに二日ばかり餌與ふることを忘れければ、狐恨み怒りてや、そのうまごを食ひてけりとぞ。

○浩然の氣

孟子。曰。我知言。我善養吾浩然之氣。敢問。何謂浩然之氣。曰。難言也。其爲氣也。至大至剛。以直養而無害。則塞乎天地之間。其爲氣也。配義與道。無是餒也。

禪意を得たりといふ者

「禪意を得たり」といふ者ありけり。「いかにして得給ひし」と問へば、わがこの身は天地のものにて、われといふものはなし。われなければ、かたきもなし。これをかの浩然の氣ともいひ置き給ひしなり」と高く心得ていひてけり。「いかにしてその所を得給ひしか」といへば、「思ひ思ひて遂に得じなり」といふ。聞きたる人いと笑ひて、「さまざま聖も説き置かれけれど、かゝる所得てし人は今の世にあるべしともおもほえぬばかり稀なるを、いまだその事々も知り給はで、いかでその所得給ふべき」といへば腹立ちて、「知らざらん人はいかに言ふとも、われこそ得しものを、など

て君はしかいふ。わが得ざることを知り給はば、いひのべ給へ。と聲ふるはして言ふにぞ、それ見給へ。怒をもいまだ捨て得ずして、『この身を捨てき。』と宣ふか。ことに『色と酒とに耽り給ふ。』と聞きぬ。それだに克ち給はで、わが身に克ち給はんとや。よし克ち得きとても、忘るてふことは、いと難きことなめりかし。得きと思ふものいかで得ん。君は武夫なれば、弓射る事もていはん。よく引きてよく放つが外に弓の道はなし。かくすればよく中るを知りても、さは出で來ぬはいかにぞや。勝負あらそふとき、人多く中てぬる折なんどは、たゞそれに勝たまほしく思ふぞかし。又はやく放つ病もあり、放ち得がたき病もあり。いづれも心の外なるものぞかし。又ゆづるの弛みてわが耳を打てば、いとど

懲りに懲りて、『またや耳打たん。』と思ふぞかし。耳をすつることもしえせず、おそく放ちはやく放つことだに心に任せず、人に負くるの口惜しさをもいまだ捨て得ずして、いかでかこの身を忘れ給はんと。にかく今は身に行ふことはつもらで、口のみたかくなり行きぬ。あるやんごとなき人ありけり。つるぎの道を得てきとて、みづから『世にならびなし。』とのみ常に言ひ給ひてけり。或日書屋に居給ふとき、末の間の障子を開き跳り出でたるを見れば、大なる男の赤裸になりて、君をめぐがけて飛びかゝるを、いで心得たりとて刀を抜きて斬らんとすれば、跳り超え、あるは伏し、左へ避け右へ走りなどして、いかにも討ち得ず。とやかくするうち、すらくと走り寄りてその刀を取りてければ、口

惜しさ限りなくいかにせんとあせり給へば、かのをのこ
 疊にひれふしてけり。よく見給へば外衛の臣下なり。その
 ものの言ふ「君はつるぎの道はよく心得給へども、いまだ
 もぬけし位にもわたり給はず。さるゆるに、自ら負ひて得
 てきとのみ思ひ給ふ。まことに得しものは、たれかよきと
 思ふべき。さる御心ましまさば、いかなるあやまちかし給
 はん。臣はつるぎの道さして習ひしにはあらねど、死を極
 めてすれば、臣をだに討ち給ふこともなり難かりしぞか
 し。これをよく／＼思ひ給はば、御身のあやまちもあらじ。」
 と涙こぼして言ひしかば、君もことに感じ給ひて、わが無
 下につたなかりしことを悟り給ひきとぞ。よくこれらの
 事を聞き給ひて、悟とやらんの道は止め給へ」といひきと

かや。

月なき夜半は

月なき夜半は、いと心の底澄みまさるものなりけり。海
 のおもて暗うして、寄來る波の音ゆたかにして、磯邊の松
 にも音せぬ風の袖にそよと吹きかふに、晝の暑さも忘れ
 ぬべし。秋はなほ蟲の音もきそひ行くに、干草の花の色
 も見えて、沖漕ぐ船にまがふ雁がねの渡るも、いづこなる
 らんと哀なるに、浦のあしべに聲あはせたるもをかし。
 まいて曉頃に月の出づれば、宵の入日の残れるたぐひに
 はあらず。海のおもて黄金の波の満ち來るにぞ、言葉に
 ものぶべしとは思はぬ。昔いぎたなくて有明の月にう

とかりし頃もありけりと思へば、口惜しきものから又羨しく思へり。それより思の移り行きて、げに古はあしき波にも舟浮けて鯉釣りしこともありき。又はいと寒き頃海に入りて鮑とりしこともありしが、今のわかうどはまだきに老いぬるさまするものぞ多き。その頃の昔物語に聞けば、浦曲の戦のおそろしさに、妻子打連れて深山へ入りし世もあり。」と聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極めぬるは、いかにぞや。かゝる事もかのわかうどの老いたるさまするをも、あはせて言はまほしけれど、また例の老いばれて繰言いふとやむつかりなん。

人を責むるは

「人を責むるはあらはなるを責むべし。」とか聞きぬ。まづ面改めたらば、「よし」とこそ言はめ。「かれは虎の皮着る羊なり。」とはいはじ。羊にもせよ、虎の皮着たらば虎にしてこそ養はめ。さらば、千里をばはしらずとも、羊の力の及ぶたけは走りもしなん。「外を責めて内を責めざれ。」と昔より聞きしを。

楓の芽の紅なるに

楓の芽の紅なるに、櫨の芽の白きを見て、必ず草木の葉は緑なるものとのみは言はじ」とは言はじ。温泉を見て、「水のひやゝかなるのみにあらず」とは言はじ。さるになにくれと、人の五のみちをそなへて生るゝことは更なり、

人はよくもあしくも生れたるなどと、さまざま疑へることなど、賢しといふ人さへも言ふとか。いといぶかし。

雨いさゝか降り續くと思へば

雨いさゝか降り續くと思へば、はやみかさ添ふところあり。されば、常に船を泛べて、みかさ添ひ行けば、打乗りて避くることのみ心とす。或年絶えて雨の降らざりければ、かねて水を恐るゝより、高き所に田作りたるが、皆枯れなんとす。水汲みて灌がんも力及ばずとやせんか、やと騒ぐうちに、かの繋ぎ置ける船のすり加ふことも打忘れぬ。世はいと變りにけり。越の國も今は雪いとうすく、信濃國の寒さも他所にかはらずとかや。この國の

〇すり修理。

かばかり雨少きことは、八十の翁も知らずとかや。「船もえうなきものなり。」など言ひてけり。つひに明の年は田を悉く川面近き方へ移してければ、あくたなどの寄來し所なりければ、「山田よりはいと生ひ立つさまも異なり。」とて歡び合へりきとぞ。常におろかなりとて笑はるゝをのこばかり、はるばる鋏かたげて山田を作るを指ざして笑ひけり。その年も川面の田はよく實りけり。

草木やしなふ者の

草木やしなふ者のいひし、西より吹く風は草木を枯らしきはむ。さるは、西より北に及ぶゆゑなり。北より吹く風は極まれば、はや陽をふくむがゆゑに、枯らしきはめず。」とか

や。げにさもありませんかし。

おほよそ躬行にてもあれ

「おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはものかは、事々に新に、物々に新なるべし。昨日の事に馴れて思ひあやまるも、かねて知れる事と思ひて敗とるも多し。かの賢き人も、女などに迷ひ、愚なる人に欺かるゝも、ひとつひとつに新ならねばこそありけれ。昨日にくしと思ひし事心にそみ、去年のうれしと思ひし事心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして身を終ふるまで

も忘るな」と語りし老人もありけり。

ある吝嗇なるもの

ある吝嗇なるもの、「今年は殊に物費しぬ」とておよび折りて敷へ立てぬ。「まづ春より秋までかのいたづきによて、飲める薬もかばかりなり。それに、かゝることもありき。など敷へつゝ言ふをつくづくと聞き居し人が、「いとさり難きが上に君が身につきたるもの一あり。これをいかで費といはん」といへば、「なになるか」と問ふ。「薬飲み給はずば、かく今日なげきごともし言ひ給はじ。かく言ひ給ふは薬の恵なれば、それに報い給ふを費と心得給ふか」といひきかの人、これを費とせちに思ひけんかし。

文作り詩作らんと

文作り詩作らんと硯引寄せて朝より夕つ方までも思ひ
 凝し居たるに、「こは姨君よりの御せうそこなり」ともてく
 れば、ふんおし切りて、「これよりいらへ仕うまつらんと言
 へ」といふ。「こは婿君のよりなり」せうとの君よりの」とて
 消息出せば、見もやらず、「俗事紛々たり」など言ひて側へ投
 げやりつ。このいらへ書くこそ文なれ。今日の事なす
 こそ學ぶ道なれ。かの「料量平かなり、畜蕃息す」とは言は
 ずや。かゝる目の前にある事をもよそ事と思ふぞはか
 なき。されど、わがざえをも足れりとし、いさゝか漢土の
 書籍手まさぐりしばかりにて、わが邦の軍物語など見て、

○かの料量
 十八史略
 孔子名丘、字仲
 尼、其先宋人也。
 ……長爲季氏
 吏、料量平。嘗
 爲司械吏、畜蕃
 息。
 司械の吏とは、
 犧牲を養育する
 官。

時の勢も知らず、人情をも辨へず、例のことわり言ひ募り
 て、わらはべなど教へ引入れんとするは、いと害とこそは
 なりぬれ。風流にながるゝものは、道知る人に笑はるゝ
 のみにてやあらん。

鳶の子のすだちする頃

鳶の子のすだちする頃、兄鳥の巢より飛び立でしに、弟の
 は羽もいまだ整はざるを知らで、つひに飛びたれば梢よ
 り落ちてけり。親鳥いかに思へども、形ははや親にまさ
 るばかりに羽のふくらかにおひたちたれば、せん方なく
 巢に入りて呼べども、もとより飛び得ざれば、立返るべき
 やうなし。二三日たちて見るに、同じところうづくま

り居たり。捕へて見れば動きもやらず、いと飢ゑに飢ゑたるさまなれば、一夜さまさま餌を與へてけり。あけの日は、餌をやらんとすれば恐しき姿しておどす。昨日は飢ゑてければ、その心も出で來ざりきと見えき。人をおどすはにくさげなれども、この儘にして殺さんも忍びずとて、はぐみやりけり。二十日ばかりたちてければ、羽もよく整ひぬ。さらばとてもとの木蔭に連れ行きて、籠よりやをら出したれば、おのれからうじて逃げ出でしまして飛び行きぬ。親鳥も人のかくしてかくは放ちしは知らず、かしく籠を出でしよと心得しさまして、連れていにけり。

友に交る道は

「友に交る道は、いかなることか心得べき」といふに、友はその所長を友とすべし。ふるきこと好むには、そのことに友とし、武技好むには、それに友とし、歌詠むものには、その道に友とするぞよき。さるに、歌とても、「このふりはあしかり、かれにまねび給ふは僻事なり」などと言ふにもおよばじ、たゞ交りてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交といへども、この二人おなじ徳、おなじ心なりしにもあらじかし。世のなかにおなじ心の人といふものは、いと稀なることなるべし。たゞわが好めるかたに引入れんとするもうるさし。この人このところは長じぬれど、こゝはいと短し。その

○管鮑の交
列子力命篇。
管仲嘗歎曰、吾
少窮困時、嘗與
鮑叔賈、分財
多自與、鮑叔不
以我爲貪、知
我貧也。……
生我者父母、
知我者鮑叔也。
此世稱管鮑善
交者。

短きところを引きのべんとするはいと苦し。さ思ふわれも亦その短き所あるものを。ことに思ふこと皆諫め物せんとするを、かの信と思ふは違へりけり。交るがうちにも知己の人は、いと稀なるものなり。それらよく言葉を求めなば、もとより言ふべし。されど、しばしすべきにはあらずかし。淺き契の友なりとても、友といふうちならば、その人の上の存亡にかゝはるばかりの事ならば言ふべし。すべて、強ひて『かくせん。』かくすくひてん。』とまげてもと思ふは、皆中道には背けりといはん。たゞその所長を友とすれば、交りがたき人もなく、われに益なき友もあらじ。かの友によてわが方の亂れんとするは、皆その短を友とする故なり。』と答へしものありきとや。

花の散るは

花の散るは、うてなのうちの實のおほきやかになりて、はなびらの居どころなき故に散るなり。『この雨に花は散りぬ。』といふは、雨のうるほひにてかの實の大きくなればなり。秋・冬に至りて葉の落つるは、若芽の莖のうらよりめぐみて、その若芽のおほきくなれば、古き葉の居どころなければ散るなりけり。

ある人足の疾ありて

ある人足の疾ありて歩むこともえせず、いといたう悩みてけり。三年になりたれど、いさゝかもおこたらざり

しを、ある醫師見て、「この薬まるらすべし。三年も経なば常に復すべし。」といふを、「さらば、その薬飲みてん。」といふ。かたはらのもの打聞きて、「この上三年とては、六年の間の苦なるを」といへば、「さにはあらじ。その薬によて三年たちてもとに復するならば、まづ一年たちなば今よりはいさゝかよかるべし。二年たちなば猶よかるべし。かくて三年にてもとに復しなん。いかで三年がうち今の如くにして、三年たちしとて俄にもとに復すべきか。今よりいさゝかにも年を追うてよからば、三年は更なり、九年にてもあれ薬飲みなん。」と言ひき。

ある人庭好みて

ある人庭好みて、「こゝに山築きてこの木を植ゑ、こゝに池つくりて岸邊に何植ゑん。」などいひけり。「いつ造るか」と問へば、「まづこの木を此方へ移しぬべし。この木はこん春移し、これは秋移しなん。移しをはりて池を掘り、その土もて山築かん。」といふを、「いつものいそぎし給ふに、こればかりはいと心長きこと宣ふ。二年三年にては、いまだまたき山水の景色はなさじ。」といへば、「この木いま植ゑば枯れんことを真に知れば、いま植ゑんの心はつゆもなし。これは立冬の頃、かれは立夏の頃植うべし。この草は清明の頃植うべし。今見てをかしと思ふばかりの大きな木、山なんどに植ゑたらば枝も枯れなどして、風景を損ずるなれば、五六尺の若木植ゑて、この山にておのづから長ずれば、

心の外の景色をなすものなり。いかで二年三年にまたくそなはるべき。十年もたちてこそをか。しうも見るべし。今俄にすべきものならぬことを眞に知りぬれば、初より物急ぎする心は露もなし。いちはやく功なさんと思ひ給ふは、本草植うる時を眞に知り給はざる故なり。といひき。げに知るは同じく知るなれど、眞に知るにあらざれば、知るとは言ひ難し。古の釣垂れし人も眞に時を知れりしなり。とまた人に語りきとぞ。

櫻の花を鹽にし

櫻の花を鹽にし壺にたくはへ、ふん附けて置きけり。まれ人のおはする頃などと思ひ置きたり。夏の頃まれ人

○古の釣垂れし人太公望、周の文王の師にして、初め渭水の濱に釣を垂れて、世を避け居しが、文王に用ひられたるなり。

○玉のさかづき徒然草に出づ。文選三都賦序夫玉卮無富雖寶非用。

おはしけれど、酒も酌み給はねば、かゝる折出さんも玉のさかづきのなにとか言はん心地すれば。とて出さず。またこと君來給ひしには、酒好み給へど風流好み給はぬもの、いかで。とてふん切らず。秋の末つ方になりければ、この頃かへり咲とて此處彼處の枝には、かなければ、も咲くこともあれば、これをもそれと思はんはいと恨あれば。とて出さず。師走の頃例の草木賣るかたには、櫻はさならなり、藤なども咲かせて賣りひさぐ。といふを聞けば、いかかはせん。それとひとしからんもいと口惜し。こん春もはや近し。さればとて貯へ置きし花をむげになすべくもあらずと思へど、まれ人もおはせねばせんかたなく、只酒飲む人の來りぬる時ふん切りて花を取出したれば、ま

らうど打見しばかりにて、やがて食ひさしながら、「これは
鹽氣ある花なり。この頃さる方にて酒飲みし時、盆に植ゑ
たる櫻を出し給ひしかば、盃にうけて飲みぬ。花は鹽氣な
きこそよかりけれ。」と言ひしを聞きて、涙おとして悔いけ
りとかや。

晴雨をよくあらかじめ言ふ者

晴雨をよく豫じめ言ふものありけり。「あすは雪降らん。」
といふ。その日になれど降らず。「風はげしからん。」とい
ふ。その日になれど吹かず。「いかにしつることよ。」とい
へば、「こゝは降らねども、いづこか降りしなり。こゝは吹か
ねども、いづこか吹きしなり。」といふ。聞く人笑ふ。後に

○箱根の山
相模國足柄郡。

聞けば、その日箱根の山は雪降り、武藏野のあたりは風い
と烈しかりきとぞ。この里の晴雨にたがへば、人の笑は
まぬかれじ。されば、言はぬには若かじかし。

今の世畫を好むも

今の世畫を好むも、大方畫を知らず。されば、尊ぶべきこ
とをば言はで、たふとからぬことを舉げ列ねて尊ぶなり。
畫のこと何にかも書きけん如く、言葉と文筆との及ばざ
るを助くるものなり。いでや、黒き白きとは言ひもし書
きもすれど、かゝるを黒きと言ひ、とあるを白きとは、何を
もてあらはさん。さるに、この畫ありてこそ、言葉にも言
ひ難きことをそのまゝに知るなれ。まして、古のさまよ

り代々の服章・風俗なども、文筆もて傳ふとても、この畫
 なくては、見ざるものを見るやうにはいかであらん。書
 と畫とを左右の離るべからざるがごとく言へるは、畫のた
 ふときをよく知りたるなり。しかるに、かれはよく描く
 ものなり、筆をくだせば何となう雲の勢をなしつ。あるは
 「遠山のほのぼの見ゆるも、海原の打霞みたるも、心に造化
 をこめて、筆にあらはすに妙なることなり」といふは、たゞ
 に一技にしたるなり。いはば「獨樂よくまはす」鞠よく蹴
 る。といふにひとし。たゞにそのたふときこと知らざる
 ゆゑに、たふとからぬことを舉げていふは、かへりてその
 道を汚すなりといひき。

人並よりは聲高く

人並よりは聲高く心強く愚なるものが、わが思ふまゝの
 事など言ふをいとことわりなき事と知りても、こなたも
 同じく聲あげて争はんもえうなきことなれば、そのまゝ
 になしおくなり。されば、いよくわればかりことわり
 あるもののやうに思して、かの「車を横に押し舟をくがに」
 といはんばかりになり行くめり。うしろにては笑ひ譏
 れど、争ふにも及ばざれば、知らぬさますれば、いよくた
 かぶりてばうぞくの振舞なすものぞかし。まして、あし
 きも人にすぐれたるが、心強くことわりなき事を押し立
 てて、世をおほひ人をかすめて、しばらく勝を取るもの、古

の書にも多きを見るべし。それによつても思ふべし、かの
「至大至剛の浩然の氣天地の間に滿つてふこと、げにさも
あらんかし。あしきも一筋に行ひて疑はざれば、一度は
世をおほひぬるものを。」

○至大至剛
孟子公孫丑上篇
孟子曰、我善養
吾浩然之氣。敢
問、何謂浩然
之氣。曰、難言
也、其爲氣也、
至大至剛、以直
養而無害、則塞
乎天地之間。

閉藏の氣一度變じて

閉藏の氣一度變じて開け出づる頃は、必ず風吹き雨もは
げし。又のびたる陽氣の一度變じてひそまらんとする
折も、かくあるなり。いかで雨・風の花をねたみ、紅葉のあ
だをなさん。おなじく降る雨なれど、ひとへの花にはは
や散りなんと恨み、八重の方には咲き初めんと待つをもを
かし。「この雨いつかはれなん」と麥搗くものは言ひ、「雨こ

そうれしけれ」と苗植うるものは言ふらん。麥搗く方の
雲をはらし、苗植うる空は降らせんとは、いかであらん。
小民うらみ歎くは絶えぬものとや言はんかし。

孔子喪あるをり

孔子喪あるをり、つねをかへて拱手し給ひしを、門弟子そ
れをまねびしかば、「二三子學をたしむの甚だしき」と宣ひ
しをもても知るべし、いにしへかたちの教ありて、かたち
よりうちに及ぼしてこそなるべきを、今は心ををさめん
として、勞しても功うすきにはあらずや。まして勞する
ほどに至るも尠きをや。

○二三子學を
禮記、檀弓。
孔子與門人立
拱而尚右、二三
子亦尚右、孔子
曰、二三子之嗜
學也、我則有
姊之喪、故也、二
三子皆尚左。
○勞して功うすき
莊子天運篇。
猶推舟於陸、
勞而無功。
淮南子原道訓。
體道者逸而不
窮、任數者勞而
無功。

事に處するに

事に處するに、利害得失に心をつくるも宜なれども、まづそのことの筋をよく見て、さて利害得失を照し見るべし。世にいふ才あるものは、まづわが利害得失はやく見ゆれば、利に就き害に遠ざからんとのみして、その筋を失ふなり。ただ害ありとも、かくすべしといふは、いといたう重き筋の事なり。されば、その筋の重きと輕きと、利害の重きと輕きとをかけ合せても、その筋の方重きは害にあふとも、その筋にしたがふべし。また才なくして筋にも暗く、ただ一筋に心得るものは、筋の輕きにも重き害を得て辭せずとするもありぬべし。才ありても道まねびて明

かなるにあらざれば、輕きを重しとして、つひに道失ふものこそ多かめれ。

生れて物覺ゆる頃より

「生れて物覺ゆる頃より、老い行くまで、いさゝかも怠らずする事あらば、必ず如何なる業にも秀でぬべし」といへば、「ただに心を用ふるにあらざれば、幾度なすとても得べしとは思はず。この飯食ひ汁吸ふは、物覺えてより日に三度はかくることなけれども、かくせんと思ふ心なければ、飯食ふに上手もなく、かへりて食ひこぼし、又は「いを骨たてしよ」などいふもあるべし。さればかくせんと思ふ志の一なり」といひき。

時ありとてや梢より

「時ありとてや、梢より心かろく散るもみぢ葉の庭に打積れば、こがらしの風は梢に聲たえて、庭の落葉のいまさら時めき顔に、舞ひつ騒ぎつ音立つるもいとさわがし。かの世捨人の今さらまた人まじはりなすに譬へつべし。」と言ふを聞きて、げにかの仕かへして風月の全身にほこるなと言はんには、世の事をば塵ひちの如く思ひ捨つべけれども、わが家をばわが子に譲りてし上は、わが今の職は風月なりけりとて、後の事も家の事もよそごとと思ふべくや。」といへば、「いかでさあらん。大君のみおやに賜ひそめしこの家の譲を得て、また御許蒙りてその子に譲りしなる

を、いかなりとも他所に見んは、かの獨善の人ならんかし。されど、その子のため家のためとて、また落葉の立舞ふやうにし侍れば、その子のすべき事もかすめ、その威徳をも消つべきなり。さればとて、物によそへなどして少し力助くるやうなる事は、なまじひなることにて、徳なくして害とはなりぬべし。もとよりその子のざえに従ひては、猶かねてより猶その助くる者等よりして心そなへもあるべきことならんかし。何處の家にもある習にて、よし事纏れしたること出で來ぬとも、その子をもしのぎて、よし清らにうちそゝぎたりとて、後のためよしとは言はじかし。後の害をもいとはでなすは、ことに異なるにあらざれば、いかであらん。されども、こはやすき事なるべし。後の害の

重きと今の重きとをよく思ひ較べて、やむことを得ずば、
 なすとも、中國よりしばし夷の力借りしやうなる悔事を
 も思ひ量るべし。たゞ二人の君ある姿になしつゝ、後のた
 めにも悪しからぬ程をなさんの道は、時にもよるべけれ
 ど、いと難き事にて猶後の害はありぬべし。たゞ仕かへし
 ぬる身は、よし身後の心地とても、生けらんうちこそいと
 いたう大事なれ。いかにとなれば、こは人のとぢめなれば
 なり。若きがうちはよし過ちし事ありとも、また改めて後
 も年を積むものなるに、人のとぢめとなりては、改めての
 後とてもいくほどかあらん。されば、仕かへしし人は、仕ふ
 るうちよりも物事慎みてこそありぬべけれ。」

禍福は組み合ふ繩のごとなる

「わざはひ・さいはひは組み合ふ繩のごとなることは、もと
 より知れることなり。もろこしの古書の世々の亂るゝあ
 とを見給へ。いといたうめでたしといふ所より亂るゝ端
 をなすものぞ。」といひしは、一言ながら心とゞむべきこと
 とや。

ある山里ありけり

ある山里ありけり。人もいと多く住み居て、何乏しきこ
 となく、家々皆富み足りぬ。絲取り機織りて衣とし、自ら
 作りし稲・麥刈り收めて一とせの食とす。外に求むること

○禍福は
 漢書賈誼傳。
 禍之與福兮、何
 異糾纏。
 史記南越傳。
 因禍爲福、成
 敗之轉、譬若糾
 纏。

となければ、その里年を逐うて繁昌す。海も遠からねど四方に山を隔つれば、關を置きて異里より物商ふことを禁ず。いをは月に幾度と定めて干したるを買ひ來りて、村のうち賣りひさぎて食ふなり。こと村へ出づる者もなければ、うらやむ心もなし。こと村よりいと富めれば、此處へいをなどもちこしたらば、珍しさのあまり打擧りて買ひなんと思へども、その村の掟正しくして破り難し。ある浦の長年頃心にかけて居けるが、かの山里のうちにも心合するものありければ、それと調じ合せていをなど賣りくることを許されぬ。いでやとて持ちこしたるが、珍しきうちは鯛よ鱸よと買ひにけり。また異浦のもの打聞きて、昔よりかの山里へ賣らまほしく思へど、掟あれ

ばもだし居しなり。かの浦より魚ひさぐと聞きぬ。浦にへだてのあるべしや。とてまた持ちこしたり。もはやかの里人とゞめんやうもなし。此處彼處の浦より持ちこして、名も知らぬいを見るが珍し。といひしが、それも常になりければ、買ふものもなく、山越え來しいを多く腐れぬ。とて浦々よりは恨など言ひぬ。その里の若き者等はこゝと浦の人々に交れば、みづから織りてしきぬ着んは面ぶせなりとて、こともの好みぬるふりとなりてければ、富み榮えたる里なりしが衰へ行き、こと里の人々あまた入り來れば、あらそひ事も絶えざりきとかや。

年ふる鯉のありけり

年ふる鯉のありけり。「いかにして様々の事にもかゝり給はで、かくましく給ふや」と問へば、さらば語りものせん。かぐはしき餌のあれば、とめきても食はまほしきことながら、これぞ大事のことと心にしめて見れば、あやしきことあるものなり。さ思ひつければ、鰭ふりて遠く遁れて、いさゝかもかへりみず。よそのいをも怪しき事よとは思へど、遠く去ることをせず、わらはべなんどはかのつりばりてふ物にかゝりて、いかほども捕らるゝを見ながらも、とにかくそのかぐはしさに心繋がれて、あたり離れずありきて、心のうちには「愚なるいをどもは皆かの餌にとらるれど、いかでわれはかれに物せられん」と思へど、ひめもすこのあたりに漂ひぬれば、かの怪しき外に餌のなきに

せん方なく、立寄りて少し食ひこんなどとするうちに、遂にはかゝるものあるぞかし。又網といふものあり。ざと音しぬれば四方皆網の目なり。こはいかにせんと思ふに、あるはあはて騒ぐもあり、又は何ばかりの事かあらんなど、賢き人をも侮りて跳りあがりて超えんとし、又は破らんとするを、人はもとより人なれば、様々にあつかひて遂に捕るぞかし。われはかのざと音するを聞けば、心しづめて水底につきて離れず。網引は上の方を行きぬ。ゆるに捕らるゝことなし。かはうそあじかなんども云ふものもあれど、深くひそまり隠るれば、そのうれひも免れぬ。また俄に雨降り出でて、思ひ寄らぬあたり又はつねいさゝか水の落つる岩がねなどより瀧の白絲くりためておちそふ勢の

○龍門の瀧
鄭道元注。
爾雅曰、鯉、鮪也。出羣穴。三月則上渡龍門、得渡爲龍矣、否則點額而還。龍門は、禹が河水を鑿通せし處、廣さ八十歩ありといふ。

はげしさに、心も浮き立ちて、かの龍門の瀧ならぬことは知りながらも、あまりに心地のよさにほだされて、その瀧を登るにぞあるは、岩かどにあたりて傷つくもあり、かうじて登りぬるも、雨やみぬればいと浅き瀬なり。かへらんど道も知らねば深きところどころ辿り行くを、行く人などの見つけて捕るぞかし。かうやうのにはかなる勢にも乗らずして、かく百歳をも幾度か經にけん」と語りき。

寢覺の里に行きて見れば

寢覺の里に行きて見れば、あないの者出で来て、「この岩は獅子といふ、虎といふ」など教ふるもうるさく、「いかでこは獅子なるべき、これははた虎の形とは見えぬを」などと

○寢覺の里
木曾八景の一。
上松驛の南十二町。

ひとつひとつ言ひ消たして行きぬ。そのかへさの道に名もなき岩のありしをふと見れば、「よくもましろの腰掛けし姿に似たり」といへば、「げに」と人もいひけり。あとより來たる人を招きて、「ましろに似たる石あり」とほこらしげに言ひて、「これ見給へ」といへば、「似たるところなし」といひけり。明の年かの寢覺の里へ行きて見しが、案内の者の言ひしことば早忘れてければ、「これ虎の姿なり。これは獅子の勢なり」と見なしぬ。はじめは「虎よ、獅子よ」と聞きて見れば、似たるやうには思はざりしが。

山人をめづらしと人は言へど

山人をめづらしと人は言へど、世のさかしき風に乗り得

てありく人もあり、えうなきものを飼ひ養ひて樂む人もあり、鶴をめで龜になれて齡むさばる人もあり、ひさごの酒によて心の駒の繋ぎ難きに至るものもあり、千年を一時としてこの世にながらふる中にはや名ほろぼすもあり、碁など好みて一日を時のまに費すもあるべし。ただ山人は、よしえうなくとも、その名は今に残れど、今の山人の眞似するものは、このところ違ふにやと笑ふ。

田舎より出てたる今参りのをうな

田舎より出でたる今参りのをうな、年もいと若かりければ、人々何くれと欺きなどしけり。黄昏の頃つかひに出でぬ。「歸らん頃はまだ暮れじ。かれを驚かしてん」と門の

○北野
山城國葛野郡

内なる柳のいと茂りたるあたりへ、白き衣引纏ひ女の髪亂せるやうに作りて置きけり。物のけぢめもさだかならぬ頃歸りにけり。柳の前を通りたらば、聲あげて逃げ惑ふべしと息を殺して垣間見居しが、何とも言はで過ぎにけり。「柳のあたりにはこの頃變化の物の出づと聞きしが、もしや見し」と問へば、「げにも柳のあたりに白き衣着し女の立ちて居しやうに見き」と驚くけしきもなし。「いかにして恐しくは思はずや」と問へば、「都へ出づる頃、垂乳根の『この観音の御守と北野とは肌を離さでよ。』とて、袋に入れて賜ひぬ。變化のものあらば、觀世音も北野の御神もましますさん。かれわれを殺さんとせば、守り給ふべし。神も佛もなき世ならば、變化のものもあるまじと思ひしな

り。と言ひきとぞ。

藤の花は

「藤の花は近う見れば美しけれど、餘りに近づければか
りはまたよからず。花やかに咲くかと思れば、未までは開
き得ず。殊におのれひとり盛を見すること難く、必ず異木
によりてたけ高き勢見するが、その寄添ふ木の枝も葉も
見えぬばかりにおほひぬれば、その木もつひに枯れぬる
にぞ、われひとり心の心ばへ見えて、木高く咲き満ちぬと思
へば、嵐などにあふとき、もとより枯れし木なれば、打倒れ
てけり。高う見えし花もつひにくさむらに埋もれて、また
見る人もなし。代々の小人の情態にも譬へつべし。」と人の

言ひけり。

しうねさ深きは

しうねさ深きは山吹と常夏となり。春も過ぎて、桃も櫻
もひとつ柳と見ゆるに、こきませし春の錦も忘れぬる頃、
山吹のいさゝか咲き出でたるも、いはぬ怨ぞ深げなる。
また花さへ散りはてて、あぢさゐも面影残す頃、はかなげ
に咲きたるも。

深川の八幡の社の祭ある日

深川の八幡の社の祭ある日、多くの人見に行きけり。二
三ばかんなる子を抱きて母の行きたるが、大きな橋あ

○深川の八幡
東京市深川区。

○こきませし春の
錦
古今集、素性法
師。
見渡せば柳さく
らなこきませて
都ぞ春の錦なり
ける。

り、渡らんとすれば、その子のひた泣きに泣きて止まず。橋を渡らじとかへれば、泣き止みつ。「いかにしつることよ」とてさまさまにすれど、初にかはらず。「まづさらば、こらに息ふべし」とて橋のかたはらに居たるが、しばしして橋の上の人騒ぎ立ちて、聲のかぎりに呼びつゝあわてふためき逃げ惑ふ。いかなることとも分かず。よく聞けば、「その橋の半より落ちて、渡りかゝりし人千人ばかりも落ちぬ」となり。それを聞くより、かの母も覺えず涙落ちてけり。「いかにしてこの子の知りつらん。神佛の助け給ひしなり」とて伏し拜みつゝ急ぎ歸りにけり。その子のみかは、その母も知りたれども、たゞ私の心におほはれて照し得ぬなりけり。もとよりその災に遭ふものは、お

○生々の徳
 易經。
 生生之謂易。
 天地之大徳曰
 生。

もてにも溢れて、そのあしき色をあらはすべければ、心の鏡ははや照しけんを知らざりしなり。こは蟲けらもその生くる道を求め、死すべきを厭ひて、殺すに心なきものには馴れ近づきたぐひは、これおのづから生々の徳そなへし大空の御心にて、それを享け得し萬の物皆かくあるべきことなり。されば、うらにあらはるゝも龜やきて見るも、皆天地のうちにあるとあるもの知らざるはなく、感ぜざるはなければ、ひじりも一の教とものし給ふとや。

人を知るはかたよりなき處より

人を知るは、かたよりなき處より明かなり。かの辟すれば正しきを失ふ。いかで、わが心くもりて人の心を照さ

ん。わが才智機轉にて照さんとすれど、時にとり暗き時あり。いかで照さん。家國のすがたは、わか／＼とあらまほし。もし年老いたる姿になりもて行かば、ものごと沈みはてて人に見知られじと、物のいろめも花やかならざれと、思ふまでになり行くぞかし。その心よりして、人に秀でんの心もとよりなければ、物の堪能上手もたえはてぬるものとなん。

昔兩頭のくちなはありきと

昔兩頭のくちなはありきと聞けばとて、くちなはの同じ程なるを捕へて、二の尾をしかと結びて離れざるやうにして、庭へはなしたり。一は南の方の草むらさして行か

○昔兩頭の
賈誼新書、
孫叔敖爲兒、出
遊、憂不食、
母問其故、泣
曰、今日見兩頭

蛇、母曰、蛇何在、曰、見兩頭蛇者死、恐後人復見之、已殺而埋之矣、母曰、無憂、汝不_レ死矣、吾聞有陰德、必有_二陽報、後爲楚相、孫子九地篇、善用_レ兵者、譬如_二率然、率然者常山之蛇也、擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。

んとすれば、一は北の方の林へ入らんとし、とみに行かんとのみして、ひとつところのみ居けり。たはぶれにおり立ちて驚かすれば、いよく挑み合ひてひとつ所にをどり居けり。いかがすらんと折々見たるが、三日ばかり經て二のくちなは和らぎて心を共に合せ、尾の方を繩の如くにして、頭を二ならべて行くにぞ、常のより遙に速かに這ひ行きけり。げに人も心の一なれば、目も耳も心にしたがひて見聞し、手足もひとつ心なればこそかゝりけれ。もしひとつの心ならば、右の手は左を凌ぎ、左は右をそねみ、手してとらんとすれば、足はよそへ行き、左は左に行かんとせば、右は右へ行かんとして、一も人の事たることはあらじかし。さるに、古より國のつかさたるも

のら、あるはそれみにくみ、又はかたみに凌ぎなどして、ただにわが威をふらんとするは、何の心にかあらん。國家の事を他所にして、只わが身あることをのみ心とするにや。かくては亂れざる國はあらじを、わが身にのみかゝづらひて、その事を思はぬは、たとひ何のざえあり何の力あるものとても、何かはせん。

政をなすも時と勢と位とを

「政をなすも時と勢と位とを知るを要とす」といふを或人のいかのぼりに譬へし、江都にていはば、春を待ち得しは時を得しなり。風を得しは勢を得しなり。わが身は高きところにて居て、四方の梢を下視して、絲を放つは、位を得しな

り。そのいかのぼりを持ち、絲など持つものあるは、人を得しなり。風の程を見て、尾などいふもの、又は絲などの程をはかり、ひきつゆるめつして、風待つは術なり。術といふもいかのぼりを揚ぐるの外ならず。べちに巧にすべきにもあらずかし。昏愚の下民をすくはんとて、人ごとに説き戸ごとに諭さるべきもののみあらざれば、かりに術を設けてその道に依らしむることもあるべし」と言ひしも聞えぬ。「とにかくよき事にて、その功なきはこの三を待ちつくる心のうすきなり」となん言ひし。

膽をねるといふは

「膽をねるといふは、いかにして得てん」とたづねしに、天命

を知るにあり。この知るはまことに知るをいふなり。只黄金などの欲は去り易し。好名の欲ぞいとかなしき。古にも『君父の命に背きて身を潔くし、朝廷の事をそしりて直をうる。これをしのぶならば、何かしのび得ざらん。』とまで、古より言ひしをや。たゞその天命をまことに知りて疑ふことなければ、つゆも心の煩なく、ちりばかりもけがれなし。『獨寝ふすまに愧ぢず。』とかいふ。かの浩々たる氣ともいふらん。』

今いふ費は

「今いふ費は、かくせずともあるべきを爲すなり。世にいふしはいといふは、かくすべき事をせぬなり。いはば水を疊

○獨寝ふすまに
劉子新論。
蓮環不_レ以_レ昏
行_レ變_レ節、顏回
不_レ以_レ夜浴_レ改_レ
容、獨立不_レ慚_レ
影、獨寝不_レ愧_レ
衾。

の上によぼしたりとて、いさゝかの水を懐の紙手にあたるまにくつかみ出しておしぬぐひ棄つるもあり、又多くこぼれぬる水に少し取出でてぬぐへば、水は疊に流れ行くをまた少し取出でてぬぐふ、つひに疊に水は半入りてければ、さておきぬるもあるべし。水のほどに随ひて紙もておしぬぐふべきを、多きも少きもその程を知らざるは、みな聖の教に違ふ。』といへば、聞く人笑ひて、紙なんどに聖の道などとはいかゞ。こはいかにしてもありなん。』といふを、紙とて空より降り來しものにはあらず。大君の賜よりして日用の事を辨ずるなり。わが國家の用度も軍出すも、凶しき年をすくふそなへも、飲み食ふものも、皆その賜のうちよりして分ち出すことにて、これはわがものなら

ぬ事なり。さてしはくしてわが物と思ふも、費してかへり
みぬも、皆賜なるを知らざるよりおこるとぞ。げに國郡多
くたまひしも少きもあるを、その程知らで身を終ふるは、
力あるものまねびして重き物扛げんとしても、われ力
なければ扛ぐることを得ざるは、誰も知れるを、わが身の
ほどを知りたる人の少きこそをかしけれ。とわらひき。

寒さを嫌ふものは

「寒さ嫌ふものは寒さにさはらず、暑さ忌むものは暑さに
中らず。」われこそ健かにして、遠里行くとも疲るゝことな
し。といふものは多く足に病を生ず。われは目の明かなる
にや、はるかなる物かすかなる物といへども、のがすこと

なし。といふものは必ず目に病を生ず。今日は頭痛み昨日
は胸のあたりふだがりぬ。と日ごとにいふものは大きな
る病得ること稀なり。若き折より薬飲みしことなし。病は
聊かも知らず。といふものは、大なる病を得るなり。といへ
ば、やんごとなき人聞き給ひて、げにも。とてうなづき給ひ
きとか。

鷹の羽に棲む蟲ありけり

鷹の羽に棲む蟲ありけり。空高く飛び翔る時は、遙に人
の住家などをも見下しつ。げにわれは事足れる身かな。
翼も動かさで千里の遠きに行き通ひ、雲居のよそまでも
揚るめり。殊にさまさまの鳥は皆おそれて逃げ走る。げに

もわれに勝つものは大方あらじ。など思ひつゝ、かの鷹の毛のうち居つゝ頻にしゝむらを刺し血を吸ひて居しが、そのやからいと多くなりもて行きしにや、つひにその鷹も斃れにけり。それより自ら出でて飛び翔らんと思へども、飛び得ず、走らんと思へども、速かならず。血も盡きしゝむらも枯れぬれば、今は命つなぐやうもなし。からうじて、まづその毛のうちをくゞり出でて這ひ行けば、雀の子の居たりけり。「われを恐れなん」と見れば、雀の子は知らぬさまなり。「いかにして見つけざるか」と傍へ這ひ寄れば、うれしげに見て嘴さし出して喙まんとす。「例なきことなれば、おそろしくて逃げ隠れぬ」とかの友どちに語りけり。

雨風の時たがへぬといふも

雨風の時たがへぬといふも、甘露くだるといふも、必ずしひごととのみは言はじ。政ゆるきに過ぎぬれば、暑さも寒さもゆるく、政ながるれば、季候の移るも正しからずなどいふ。天人一理なれば、さもあらんかし。また政にあやまちあれば、大空のとがめありといふも、あやまち知るものはせめを見る。あやまち知らざるものは、せめを知らず。いつも豊にて災なしとす。たまくゝ災知りても昔の例など言ひて、心にかけてぬ輩は遂に身にかゝる災となりぬとかや語りき。かんずなんどの大空のことなど言ひて、人をせめし例あれば、なしとはいかゞ言はん。さ

〇かんす
漢 偶。

れども、又大空のかへりみを受くるものは、よくそのせめを得とかや言ひて、かぞいろのわが子をよく育てなさんと思へば、さまざま、教へ導くまゝに、あるはいきめきてのしりなどすれど、わが子ながらも思ひ棄つる時は、むつがる聲をもなさず。されば、かぞいろのせめなしと思へば、つひに大なる禍を得るなり。禹水湯旱とかいふ如く、聖はなほそのせめありて、改め給ふことも速かなるべし。殊にかくても、民草のうれひ少きをもてたふとしともいふと、また言ひき。

伊勢物語は梅の如く

「伊勢物語は梅の如く、源氏物語は櫻の如く、狭衣は山吹の

如し。徒然草は薬玉につくれる花の如し。」と人はいひけり。

わが悪しきをば

わが悪しきをば桀・紂を引きてなだめ、人の善きをば堯・舜を引き出でてとがむ。「かれはかゝる悪しき事なしぬ。」といへば、「げにさあらん」といふ。「このものかく善きことし侍りぬ。」といへば、「いかゞあらん、いぶかし。」といふ。「げにも人は悪しき心あるものかな。」といへば、「善き名得まほしと思ふが故に、人の悪しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり。」と言ひき。

もろこしの君と臣との道は

○桀・紂
夏の桀王・殷の紂王。

「もろこしの君と臣との道は、わが國のとは違へれば、いひわくべき事にはあらねど、范蠡がいさを遂げて後、船に乗りて去りしを難きことのやうに言へど、代々のいさを遂げし人のをはりよからぬより見れば、よしとは言はん。されど、船泛べて去ることだにならば、難きことはあらじ」といふを、よきをばよきになして見給へ。よきをもその上のこと言ひて責むるはいと悪しき心ぞや。聖ならではゆるす人はあらじ」と。

今日はいと長閑なり

今日はいと長閑なり、いでや隅田川原の花見んと、小舟に乗りて行きたるが、花見んと立出づるもろ人のさまげに

や都のみやびを盡せり。さまぐの心々に打向きて行くに、女房なども何か口たよきつゝ、心空にありくもあり。馬馳せて花をも眼にかけず、いとばうぞくに行くもあり。やごとなき人にや、人々うち圍みてつゝ、ましげに行く女もあり。あるは木かげにてはや瓢傾け、何やらん、やたて出づ書いつけ、かうよりして花の枝につけてわれはがほなる風情なるもあり。今日はげに晴れに晴れて一天に雲なく、富士も筑波も手にとるばかりに見えたれど、またそれを打眺むる人もなし。ましてかく晴れたる日は、とみに雨風のありなどいふことは、つゆ思ふ者もあらじかし。この長閑なる御代の春の御恵にぞ、かく心ゆたかにたのしび遊びて、かへさ忘るゝばかりしても、何のわづら

○筑波根
常陸國筑波郡。

ひうれひもなきに、この花も昔よりつきぬ御惠深き露に
生ひそひきとやらん聞けば、さ思ふ人もありやなしやと
見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の惠をば思ひも
寄らず、いつも空晴るゝものとはかりも思はぬ輩多から
んなど思ひかへして、四方をふと打見れば、筑波根のあた
りいとほそくひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、
世にはやてなどいふものなりけり。あまりに朝よりめ
づらしく晴れたる日なればとて、かねて簔も笠もはなた
で居しが、はや艚おしたて漕ぎかへるを、いかにこの花を
見棄ててかへるは、かりがねにつらさやならへる。その音
ばかりまなべよかし。など口々にわらふを耳にも入れて
漕ぎ去りぬ。いつかその雲のいとひろごりてけるが、か

の輩は露も知らず。日のかげろふも知らず。今日はあ
つきばかりなりとて、肌ぬぐもあり、または衣などぬぎて
馳せありくもありぬべし。雨にさきだつ風の一と通り
吹き落ちたれば、こは花よと思ふ間もなく、いさご吹き立
てたれば、たゞ驚きて居るがうち、雨の降り出でたり。初
は心地よき雨などともいひたらんが、後には人の聲に雨
の音もせず。馬を馳せてかへるもあれば、おどろきあわ
てて堤よりまろびて落つるもあり。女などはいといた
う見苦しきまであわてふためきて、はじめ装ひしをも自
ら夢とや思ふらんさまなる、まして酒に酔ひて濡るゝも
知らず顔に笑ひなどするもあれば、思ひ寄らぬおろかな
る雨かな。と怒りのゝしるもありぬべし。かの舟は早く

漕ぎ行きぬれどわが住む浦は遠ければ、とある橋の下に
 舟とめて居しが、橋の上など人の走りさわぐは、なるかみ
 のやうに聞えぬ。はや雨もかぞふるばかりに川のおも
 に見ゆる頃、夕月のことさらに新しくみがき出でたれば、
 はや雨の名残もなし。堤の花いかゞあらんと漕ぎかへ
 して見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間にはほ
 ぼのと月の見えたるは、わがためにつくりなしけんと思
 ふばかりなり。濡れにし人はいかゞしたりけん。この
 月などは思ひも寄らであらんなど、ひとり思ふも何とな
 く心おごり行きぬ。かぞいろも、われひとり人にこえて
 心地よしと思ふときは、いましめ給ひたれば、またあや
 まちやしぬべくとおそろしく覚えければ、飲み残したる

酒携へてつひに漕ぎかへりぬとか。

花月草紙抄終

大正五年八月廿三日印刷
大正五年十二月十六日訂正再版發行
大正五年十一月十九日訂正再版發行

定價金參拾參錢

大正七年臨時
定價參拾八錢

大正八年臨時
定價四拾六錢

著者 小原要逸

發行者 大葉久吉

東京市日本橋區本石町三丁目拾七番地

印刷者 渡邊八太郎

東京市牛込區榎町七番地



發行所 關西專賣

東京市日本橋區本石町三丁目
振替口座東京二八〇番
大阪市東區淡路町四丁目
振替口座大阪四三番

東京寶文館
大阪寶文館

印刷所 印刷株式會社



